平成 27 年度夏季（2015 年 7 月～8 月）
海外短期研修報告書
Report on Short Study Abroad Programs
July - August, 2015

お茶の水女子大学　グローバル教育センター
Global Education Center, Ochanomizu University

「2015 年度夏季 海外短期研修報告書」の発刊にあたって

グローバル教育センター長
戸谷　陽子

お茶の水女子大学グローバル教育センターでは、2015 年度夏季短期研修派遣プログラムとして、2015 年 8 月から 9 月に、マンチェスター大学・SOAS ロンドン大学（英）、ニューサウスウェールズ大学（豪）、梨花女子大学校（韓）、ストラスブール大学・ブレーズパスカル大学（仏）、マギル大学（加）、ボン大学（独）、ユトレヒト大学（ｵﾗﾝﾀﾞ）の 9 大学に合計 51 名の学生を派遣しました。本報告書は 2 週間から 6 週間の研修に参加した学生の帰国報告をまとめたものです。派遣先は異なりますが、それぞれに慣れない生活様式や気候、異文化体験を新鮮に受けとめて、いっしょうけんめい勉強し、どの学生もたいへん充実した、そしてかけがえのない体験をし、大きく成長して帰国したことが、生き生きと手にとるように伝わってきます。

本学では、平成 16 年より海外短期研修を開始しました。当初は英語語学研修プログラムのみでしたが、現在は、英語以外の言語の語学研修や語学研修にインターンシップを加えたプログラム、派遣大学が開設する正規の専門科目の聴講等、さまざまな選択肢を備えた魅力的なプログラムを提供しています。また、本学の協定大学付属機関や本学が精査したプログラムで英語ほか外国語の語学研修を受け、また、協定大学の正規授業の聴講することで、本学の単位（コア科目英語）が 4 単位まで認定されることも、本学主催の短期研修の魅力です。さらに、2010 年度春季プログラムから、「インターンシップ科目」1 単位も認定されています。

本学主催の短期研修のもうひとつの魅力は、グローバル教育センターが研修の質を保証できるプログラムを提供していることです。研修の内容を精査したプログラムやその上で本学と協定を結んだ大学のプログラムにのみ学生を派遣するという方針、渡航前オリエンテーションおよび「異文化適応」や「危機管理」に関する事前研修の提供、説明会に加え、前年度研修参加者との短期留学相談会を開催するなど、短期研修の効果を最大限に高める機会を提供しています。研修は比較的短期間ですが、事前準備から帰国後の振り返りまで、きめ細かく一貫したサポートをすることで、研修の体験をいっそう充実したものにするお手伝いをしています。

報告書を読むと、海外で実際に生活することで、さまざまな価値観に触れ、自身の日本人としての視点を求められることを実感し、確実にグローバルな視点を獲得して成長している参加者の姿が浮かびます。大学生活に留学を組み込むことを考えている学生のみなさん

にもぜひ参考にしていただきたいと思います。

本プログラムの企画・運営にたずさわるグローバル教育センターとしても、参加者に充実した体験を提供できたことを実感し、たいへんうれしく思います。短期研修プログラム推進主担当として説明会や事前研修、個人相談等企画から運営まで尽力されたアソシエイトフェローの李京和先生をはじめ、特任講師の渡辺紀子先生、長塚尚子グローバル教育センター教務補佐、有家佐和子同教務補佐、お茶の水女子大学国際課職員のみなさんには、このプログラムを支えていただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

2015 年 11 月吉日

目次　Table of Contents

グローバル教育センター　アソシエイトフェロー
李京和（い・きょんふぁ）Kyunghwa Lee

2015 年度 夏季短期研修の概要

<お茶の水女子大学主催　→　お茶大が航空券・保険などを手配>

University of Manchester（イギリス）

期間：8 月 2 日～9 月 6 日（5 週間）

滞在：学生寮

参加費：約 62 万円　（授業料＋旅行代金＋宿泊料＋保険料など）

　　奨学金最大 21 万円支給

研修内容

①週 15 時間の Core Language Module：英語の 4 つのスキルを向上

②週 6 時間の Target Module：アカデミック英語・IELTS 準備などの講座

③イギリス文化・フィールドトリップ

コア英語 4 単位認定

University of New South Wales（オーストラリア）

期間：8 月 1 日～9 月 14 日（6 週間）

滞在：ホームステイ

参加費：約 74 万円

（授業料＋インターンシップ代＋旅行代金＋ホームステイ代＋保険料など）

　　奨学金最大 19 万円支給

研修内容：①4 週間の英語コース（アカデミック・イングリッシュ）

　　②2 週間のインターンシップ

（今年度は現地小・中・高で日本語アシスタント、民間企業、ショップなど）

　　③ホームステイ（食事付き）

コア英語 4 単位認定、インターンシップ 1 単位認定

＜協定校など主催→自ら申請、航空券・保険を手配、お茶大が手伝う＞

SOAS University of London（イギリス）

期間：8 月 3 日～8 月 21 日　もしくは　8 月 24 日～9 月 11 日（3 週間）

滞在：学生寮

参加費：約 25 万円（授業料＋宿泊料。旅行代金・保険料は別途）

　　奨学金最大 15 万円支給

研修内容：レベルごとの英語研修 or 専門授業

コア英語 4 単位認定

McGill University（カナダ）

期間：8 月 3 日～8 月 21 日（3 週間）

滞在：大学寮

参加費：約 39 万円（授業料＋宿泊料＋1 日 3 食込み。航空券・保険料は別途）

　　奨学金最大 13 万円支給

研修内容：レベルことの英語研修、文化体験、モントリオールのフィールドトリップなど

コア英語 4 単位認定

Blaise Pascal University（フランス）

期間：7 月～8 月の間で 2 週間（日程はコースによる）

滞在：学生寮

参加費：　約 12 万円（授業料＋宿泊料。航空券・保険料は別途）

　　奨学金最大 13 万円支給

研修内容：フランス語研修、フランス文化など

海外交換留学認定科目 2 単位認定

University of Strasbourg（フランス）

期間：8 月 10 日～14 日／21 日／28 日（1 週間／2 週間／3 週間コース）

滞在：学生寮

参加費：約 18 万～22 万円（授業料＋宿泊料。航空券・保険料は別途）

　　奨学金最大 13 万円支給

研修内容：フランス語研修、フランス文化など
海外交換留学認定科目 4 単位認定

Ewha Womans University 梨花女子大学校（韓国）
期間：8 月 6 日～8 月 20 日（2 週間）
滞在：大学寮
参加費：約 4～6 万円（宿泊料のみ、授業料免除。航空券・保険料は別途）
　　奨学金最大 12 万円支給
研修内容：韓国語研修、韓国文化体験など
海外交換留学認定科目 2 単位認定

University of Bonn（ドイツ）※協定校ではありません。
期間：8 月 5 日～8 月 28 日（3 週間半）
滞在：大学寮
参加費：約 13～15 万円（授業料＋宿泊料。航空券・保険料は別途）
　　奨学金 8 万円支給
研修内容：ドイツ語研修、ドイツ文化など

Utrecht University（ユトレヒト大学ーオランダ）※協定校ではありません。
期間：7 月～8 月の間 1 週間～6 週間（日程はコースによる）
滞在：学生寮
参加費：約 15 万～40 万円（授業料＋宿泊料。航空券・保険料は別途）
　　奨学金 8 万円支給
研修内容：オランダ語研修もしくは英語研修、その他専門授業コースなど。

MANCHESTER
1824

The University of Manchester

The United Kingdom

参加者 19 名

マンチェスター大学での研修を終えて

文教育学部言語文化学科１年　伊藤千雪樹

授業内容について

私たちの時間割は、コア英語の授業とターゲットモジュールの授業の二つで編成されていました。

コア英語の授業では、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングを勉強しますが、特にリスニングとスピーキングに重点が置かれていました。ペアワークやディスカッションが多く、聞いたり話したりする練習をたくさんすることができましたし、クラスメイトとの交流も楽しかったです。

ターゲットモジュールのクラスでは、イギリスの文化を幅広く学んだり、金曜日はマンチェスター市内にある美術館や博物館にみんなで出かけたりしました。

右上の写真は、最後のコア英語の授業でさよならパーティーをしたときのものです。みんなでお菓子や飲み物を持ち寄ったり、自国の食べ物を紹介したり、いろいろな音楽をかけて楽しみました。

現地での生活について

マンチェスター大学からバスで 20 分程度離れた場所にある寮で生活をしました。私は、4 人のお茶大生と一緒のフラットで生活しました。私は個人的に、この寮での生活が本当に楽しかったです。時には一緒に料理を作ったりカードゲームをしたり、それぞれの週末や授業のことについて話したりするキッチン・ダイニングルームが本当に私の心の安らぎになっていました。お互いを思いやることの大切さを改めて学びました。

現地では基本的に自炊をしていたのですが、地元のスーパーには現地でしか見たことがないいろいろな商品が売っているので、見て回るのが面白くて特に買うものがなくても行っていました。

週末について

週末は、各自で計画を立てて旅行にいったり、マンチェスター大学が主催する日帰り旅行

のツアーに参加したりしました。私は、マンチェスターのツアーで湖水地方に、友達と計画を立ててロンドンやウィットビー、リバプールに行きました。ロンドンには、金曜日の午後から日曜日まで約三日間滞在しました。前々から見たかったウィキッドのミュージカルや、有名な観光スポットである大英博物館（写真）、バッキンガム宮殿、ロンドン・アイ、ビッグベンや、シャーロックホームズ博物館などにも行くことができました。夜のビッグベンは本当に綺麗でした。土日はまるまる休みなので自由に動き回ることできるし、マンチェスターは比較的いろいろなところへ出かけやすい場所だと思うので、週末を利用してできるだけどこかへ出かけてみるのがいいと思います。

まとめ

海外での長期滞在は初めてで、戸惑うことや慣れないことがたくさんありました。特に自分でも驚いたのが、イギリスの食べ物や飲料水に馴染むのに思いの外時間がかかったことです。それから日本との気候の違いもあって、最初の方は体調を崩しがちでした。

しかし、そのような大変だったことも含めて、この１ヶ月間はとても充実したものになったし、確実に自分を成長させてくれる素晴らしい機会になりました。新たな気づきがたくさんありました。授業や現地の人との対話を通して実感したのが、「自分は日本についてほとんど何もしらないのだ」ということです。日本の震災や原発などの政治的な問題から、歴史や文化などの根本的なものも含めて、わかっているようでほとんどなにもわかっていないし、考えているようでなにも考えていないのだということを感じました。

この経験を大切にして、世界を知る前にまず日本のことについて改めて深く考え直したいと強く思いました。それが今後日本人という立場から世界全体と関わることにも大きく繋がってくることと思います。

マンチェスター大学夏期語学研修を終えて

文教育学部　人文科学科　２年　宇野慈子

８月から９月にかけて５週間、イギリスのマンチェスター大学で語学研修を受けました。

研修内容

コアとターゲットモジュールと呼ばれる２つの授業を受けました。コアは学力別のクラスなので他のクラスがどのような内容だったのか知りませんが、私たちのクラスは文法、スピーキングを中心に行われました。教室の外を出て街の人にインタビューし、大学の敷地内にあるオブジェや建物について調べてパワーポイントを使ってのグループ発表もしました。私はサウジアラビアの女性の方と一緒のグループになったのですが、調べるところから資料をつくるところまで全て英語で作業する難しさを知りました。コミュニケーション手段は英語しかなく、先生が間にいない状況で発表のための一連の作業を行うことはとても難しいことでしたが、同時に相手のことを理解する良い機会でした。モジュールはコアよりもさらに生きた英語を学ぶ、という感じで実際に美術館やミュージアムに行ったり、映画を鑑賞したりしました。

滞在先

マンチェスター大学の寮で生活しました。部屋は各自に与えられ、キッチン、トイレ、シャワーはフラット共用でした。食事は三食自炊です。フラットは全員日本人で気安さがある反面、積極的に街に出て行かないと英語に接する機会がないという状況でした。寮の生活で強く感じたのが共同生活でのマナーの大切さです。これは言語がどうこうより常識として大切な事だと思います。異文化交流といっても土台には共通の礼儀や感覚があると思いますが、それがあってからの交流ではないでしょうか。自分たちの生活態度を見直すきっかけにもなりました。

現地生活&現地の人々について

週末にはイギリス各地を旅行しました。毎週末、大学が日帰りツアーを用意してくれて、それに参加する人もいれば自分たちで計画をたてて各自で行く人様々です。私は一回だけ大学のツアーを利用してその他は自分たちで旅行しました。旅行先で予約していたホテルの部屋が使えなかったり、電車に乗れなかったり様々なトラブルがありましたが、今となっては良い思い出です。また、マンチェスターには各国からの留学生や労働者が多く集まり、特に中東アジアから来た方が多く、イギリスにいながら中東アジアの文化にも接する機会が多くありました。

寮は全員日本人、クラスも日本人が多数を占める状況で自分から積極的に英語に触れていく姿勢が大切です。私はマンチェスター大学の運動クラブ活動に興味があったので、事前に調べて情報を集め、実際に学生に混ざって参加する事ができました。同じ競技でも日本とイギリスとでルールが異なり、イギリスでのルールを教えてもらい、この場合日本ではこうするんだよ、という具合で拙いながら交流することができました。はじめは日本語が全く通じない見知らない集団のなかに一人で入っていくことがとても不安でしたが、一旦歓迎されるとあとは競技を通じてチームメンバーと得点失点に一喜一憂して気持ちを共有する事ができました。残念ながら参加できたのはこの一回だけで、マンチェスター大学も夏休み中のためメンバーが集まらず、週に一回のペースで行われるはずの活動も全てキャンセルされてしまいました。キャンセルかどうかは場所を使わせてもらっているセンターの管理人さんから聞いていましたが、毎回毎回日本からの学生が聞きにくるというわけで顔を覚えてもらったらしく、最後の二週間は顔を見ただけで今日もキャンセルされたよだとか、今度は大学が始まる９月にマンチェスター大学に来た方が良いなど教えてもらい、親切にしてもらいました。好きな事だからなのか、自分でも驚くぐらい活動に参加する事に対して積極的に行動できました。コミュニケーションで大切なのはどれだけその言語を習得しているかではなく、どれだけ伝えたい、知りたいという気持ちがあるかだということを学びました。言ってしまえば言葉はツールであり、それを活かすかは自分自身にかかっているのだと思います。

今回の研修は得るものが多い、とても有意義なものでした。申し込む前は自分の英語力に不安を感じていましたが、それでもなんとかなりました。もし、行こうか行かないか迷っているのであれば、ぜひ行くことを勧めます。

マンチェスター大学研修を終えて

生活科学部食物栄養学科　１年　浦川美祐

８月２日から９月５日までの５週間、マンチェスター大学での短期研修を受けてきました。夏休みの自由な時間を有意義に過ごし、語学力の向上はもちろん異文化に触れることで視野を広げたいと考えこのプログラムに参加しました。

授業の内容は大きく二つに分かれていました。一つ目はコア授業です。コア授業では主にスピーキングや文法の確認などを行いました。私は今までスピーキングの練習などを一切おこなったことがなかったので、授業がはじまる前はついていけるか不安でいっぱいでした。しかし、親切な先生方とクラスメイトのおかげで楽しく授業をうけることができました。1日あたり１コマ 90 分×3 と授業数は少なくありませんでしたが、全ての授業の内容が濃くて大変集中することができました。授業を通してリスニング能力がとてもあがったように感じます。二つ目はターゲットモージュールという授業です。この授業では街中の美術館や博物館にでかけ、調べ学習をしました。マンチェスター市内の観光にもなりとても楽しい授業でした。

また、週末にはたくさん観光にいきました。ロンドン、リバプール、湖水地方、ウィットビーなど、イギリス国内の有名な観光名所に行きました。自分たちで列車を手配したりホテルを予約したりするのは大変でしたがとてもいい経験になりました。また、学校側が手配してくれる旅行もあり、それらの旅行では気軽に観光地を巡ることができました。私が行ったなかで一番印象にのこっているのはロンドンです。ロンドンではバッキンガム宮殿、ウエストミンスター寺院、ロンドンアイ、大英博物館、ナショナルギャラリーなどの世界的にとても有名な場所を訪れることができました。バッキンガム宮殿の内装がとても美しかったことが大変印象に残っています。今まで画面越しでしか見られなかったイギリスの歴史、文化に直接ふれることができ、掛け替えのない思い出となりました。

私は今回の短期研修を通して、英語力はもちろん積

極的に行動する力も身につけることができました。海外の地で一ヶ月生活することで精神的に大変成長することができたと思います。イギリスで、マンチェスターで最高の夏休みを過ごすことができて本当によかったです。

マンチェスター大学研修帰国報告書

理学部　物理学科　１年　横山　彩音

①　研修内容

授業はコア･モジュールとターゲット･モジュールに分かれています。コア・モジュールでは教科書に沿ってリスニングや英文法について学びました。
スピーキングがメインで、毎授業２分間のスピーチやゲーム、グループワークを通して積極的に話すことが求められました。各題材を扱うごとに分からない単語の解説があり、語彙を増やすことができました。課題として読書や文法の演習も行いました。学期末にはエッセイを書き、プレゼンを行うことで総合的な仕上げをしました。エッセイを含めて何度か書いたものは添削をしてもらえ、学期の途中にはメインチューターとチュートリアルを行って自分の弱点や不安なところを話し合うなど、しっかりとしたサポートをしてもらえました。ターゲット・モジュールでは主にマンチェスターや、イギリス全体の文化を学びます。週に１回博物館や図書館などに行き、そこで学んだことについてプレゼンを行ったり、テーマについて予習をしたりしました。イギリス人がよく使う表現なども教えてもらえ、充実した授業でした。

②　滞在先について

Fallowfield campus にある、マンチェスター大学の寮の一つの Oak house に滞在しました。１フラット８人で、キッチンが１つ、お風呂とトイレは２つずつあり、少し不便な面もあったけれど十分快適な生活ができました。はじめはキッチンにまな板や食器用洗剤がなく、入居したときには自分一人しかいなかったので、１人でいろいろなものを揃えていかなければいけなかったのが少し大変でした。しかし近くにはコンビニのようなお店や大きなスーパーもあったし、大学から寮までの道のりにも小さなスーパーが何軒かと、飲食店もあったので自炊、外食ともに食事に困ることはありませんでした。洗濯機の使い方が分からなくて会社に電話して聞いたりもしましたが、良い英語の勉強になりました。

③ イギリスの人や生活について

滞在中にいくつかの街を訪れましたが、特にマンチェスターはアジア人をはじめ外国人が多く、あまり寂しさを感じませんでした。道にホームレスの人がいたりもして、たまに小銭を要求されましたが、特にトラブルはありませんでした。ホームレス問題は日本にも共通してあることなので、国によっての違いなどに少し興味がわきました。また渡航前は、イギリス人は冷たいというイメージがありましたが、そのようなことはなくむしろ温かい人柄の人が多かったです。目が合えば微笑んでくれ、お店の人は明るく声をかけてくれて、知らない人どうしでも気軽に話したりしているのを見て、とても友好的な国だと思いました。

生活については、日本とあまり変わらないように感じました。質や量に関して不便だったことは確かにあったけれど、必要なものは何でも手に入ります。余暇については、広い芝生の公園が多いため、子供達が友達や家族と遊んでいる姿がよく見かけられました。大人はお昼からパブに行ってお酒を楽しんでいたり、晴れている日には外に出て何もしないでいる人もたくさんいました。そして、イギリス文化の中で音楽とフットボールの色が濃いのも印象的でした。街中やパブで音楽を演奏していたり、フットボール観戦できるパブが多くあったりしました。これらについては事前に少し勉強しておけばよかったなと思いました。

④ 反省、次に生かしたいこと

まず、イギリスについてはもちろんですが、日本について調べておくべきでした。歴史、政治、文化など一般教養的な部分を意外と知らず、それなのに聞かれて答えられないということがありました。また、積極性もとても必要でした。グループや教室で、寮でももっとたくさん自分から話せていたら、英語がさらに上達していただろうと思います。せっかく留学に行ったのだから、人と関わろう、話そうという意志が本当に大切でした。今回とてもいい経験ができてまた留学に行きたいので、その時はもっと自分から意欲的に動きたいと思っています。

イギリスでの留学体験

理学部　生物学科　１年　景山　慧美

マンチェスター大学　正門

1. 研修内容について

1 コマ 1.5 時間の授業を、月曜から木曜までは 3 コマ、金曜日は 2 コマ受講した。文法を学ぶ基礎クラスの他に、週３回の特別授業があり、金曜日はマンチェスター市内の博物館やアウトレットなどを見学することができた。1 クラスの人数は 8,9 人ほどで、2,3 人のグループに分かれて課題を行うことが多く、また、クラス全体でディスカッションを行うこともあった。テーマはスポーツについて、迷信について、映画についてなど、イギリス文化に関係するものが多くあった。文法や発音、語彙についてもネイティブの教師の方が逐一チェックしてくれるので、新しい発見も多く、英語能力が向上していることが実感できた。

2. 宿泊先について

大学から徒歩で 45 分の距離にある大学のフラットに宿泊した。1 つのフラットで最大 8 人が生活でき、私は 5 人で 1 つのフラットを使用した。フラットはキッチン、風呂、トイレが共用で、その他に机とベッドがある個室があった。キッチンはコンロや冷蔵庫、電子レンジ、鍋やフライパンは十分にあったが、包丁とまな板が無く、買い足す必要があった。

3. 現地生活と現地の人々について

日本よりも物価が高く、安く食事を作るためにスーパーのオリジナル商品を利用することが多かった。また、開店時間が遅く閉店時間が早いので、時間を作って計画的に買い物をする必要があった。

日本ほど時間に正確ではないが、バスの本数が多く、移動に困ることは無かった。しかし、バスの 1 回の料金が£1（約 200 円）または£2 で割高であり、デイリーパスやウィークリーパスを購入した方が経済的だった。

現地の人々は親切でフレンドリーな人が多く、こちらが英語で詰まっても根気よく付き合ってくれた。

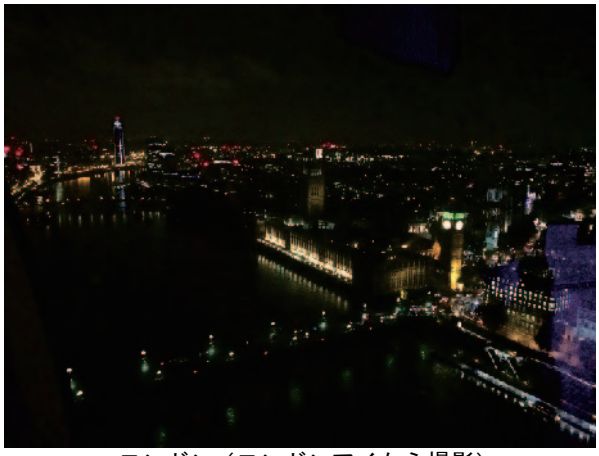
4. その他（旅行について）

ウィットビー

毎週末、大学が行っているツアーに参加することができ、私は二つのツアーに参加した。一つはウィットビーという港町で、魔女の宅急便のような町並みと、美味しい魚料理を楽しむことができた。もう一つは有名な湖水地方で、クルージングをしながら美しい景色を楽しみ、またビアトリクス・ポターの記念館を見学することができた。

大学のツアーの他に、休日を利用してロンドン、リヴァプール、エディンバラに旅行した。イギリスは鉄道が発達しているので、日帰りでもギリギリまで旅行先に滞在することができた。

5. まとめ



ロンドン（ロンドンアイから撮影）

外国で生活するという体験は、刺激的で新鮮なものだった。大学まではバスを使って通学している人が多かったが、私はほぼ毎日歩いて通学した。寮のあるFallow fieldから、インドやサウジアラビアなどの料理店並ぶカリーマイルを抜けて、大学の広いキャンパスの中心の道を進むと教室にたどり着く。徒歩45分の道のりは決して楽ではないが、朝のさわやかな空気の中で公園や教会などの道沿いの景色を楽しむことができた。

授業以外でも英語を使わなくてはいけない状況はもちろん多いが、日常会話そのものはそこまで難しくない。しかし、ちょっとしたトラブルがあった時は英語で状況を説明しなくてはならず、より高度な会話能力が必要になった。例えば、私はロンドン旅行中のホテルで、英語を喋れないが日本語が少しできる中国人に頼まれてホテルマンの方と彼女の会話の通訳をした。もちろんトラブルなど無いほうが良いのだが、英語の上達にもっとも効果があったのはこのような会話だと思う。授業はもちろん大切だが、旅行などで日常生活から離れることも語学やその国を知る上で大切だと感じた。

マンチェスター大学での研修を終えて

理学部　化学科　１年　佐々木美織

研修内容について

英語力（読む、書く、聞く、話す力）の向上が第一の目的としておかれた研修プログラムでした。日本の英語教育というと読む技能を伸ばすものが大半ですが、このプログラムは相手とコミュニケーションをとることに重きを置いたものでした。授業は２種類あって、１つ目は文法などを学んだり、簡単なトピックについてグループで話し合ったり、興味がある分野に関してのプレゼンテーションを行ったりするクラスでした。クラスのレベル分けは初日に行われるテストによって決まり、日本人の他にはアラブ系と中国韓国のアジア系の方が多かったです。授業内で講演会を聞きに行ったりすることもありました。２つ目は、私はマンチェスターの文化を学ぶクラスで、マンチェスター市内の博物館や美術館を週に一度巡り、それに関する議題についてディスカッションを行うというものでした。

滞在先について

マンチェスター大学の寮に滞在しました。自分の部屋に入るまでに３回も鍵を開けなければなりません。部屋にはベッドと机、クローゼット、洗面台、鏡、姿見がありました。トイレやキッチン、冷蔵庫、お風呂は７～８人で共有です。週に一度か二度、共同で使える部分に関しては清掃が入ります。食器などもキッチンにあります。また、近くにスーパーがあるので買い出しはそこで行いました。大学は寮から少し遠いのでバスに乗って行きました。右の写真は寮のキッチンの写真です。

現地の生活と現地の人々

至るところで文化の違いを感じることができました。スーパーのレジでは、お金を払い終わるとまたねと言ってもらえます。大学の先生は日本よりも友達と近いような感覚でした。日曜日はほとんどのお店が夕方に閉まってしまいます。街中では中国語で話しかけられることもしばしばありました。イギリスにいながら中国という国の大きさも感じることができました。

その他

休日や授業が早く終わる日にはマンチェスター市内の観光やイギリス国内を観光することができます。私はロンドン、ウィットビー、湖水地方に行きました。同じイギリス国内といえど雰囲気がそれぞれ違ってとても楽しかったです。写真はロンドンを訪れたときにウェストミンスター寺院前で撮った写真です。

マンチェスター大学研修を終えて

文教育学部人文科学科　佐山友梨

1　研修内容

初日のテストによって英語の習熟度が判断され、それによってクラス分けされた Core Module と、イギリス文化を学びマンチェスターの美術館・博物館等をめぐる Target Module という二つの授業がある。Core の授業では、テキストブックの文章を読み、論題について隣の人と意見を述べ合い会話することが中心であった。またディベート、プレゼンテーション、英作文、洋画鑑賞など様々な活動を行い、話す・読む・書く・聞く全ての能力を向上させることが目的となっていたのも良かった。

Target の授業では、イギリスの習慣や行事に関する文章や、放映されているテレビ番組を見ることで、なじみのなかったイギリス文化を知り、理解することができた。また Core の授業も含めて、フィールドワークが多いことも特徴だった。通行人に質問をし、作品や展示物を現地に赴いて見ることができ、教室内にとどまらない授業を受講することができた。

またクラスの構成は、中国人、韓国人、サウジアラビア人とアジアの学生が占めていた。彼らは積極性や語学力において日本人学生とは大きく差があり、かなりの刺激を受けた。また、担任の先生は我々の相互理解を深めようと努力してくださった。特に授業の一環としてサウジアラビアのクラスメイトが勧めるアラブ料理店に連れて行ってもらったのは、異文化理解の良い思い出となった。

２　滞在先

我々はマンチェスター大学が運営する寮に 5 週間滞在した。授業が行われる校舎からは徒歩 50 分、バスを使うと 15 分程度の距離と多少遠かったが、周りには大型のスーパーマーケットや飲食店があるため生活には困らなかった。

寮では 8 人で 1 つのフラットに住むことになっている。個室はあるが風呂・トイレ・キッチン・ダイニングなどは共有するため、フラットメイトとのコミュニケーションは必須である。私のフラットでは 8 人中 6 人がお茶大生、2 人が他大学の日本人学生であり、当然意思疎通に障害は無く、学年や学校の枠に関係なく仲を深めることができた。特にダイニングは

皆が集まる場となり、共にとる食事はとても楽しいものだった。

３　現地での生活、現地の人々

言うまでもないが、マンチェスターの街へ一歩出れば我々は英語を使わざるをえない。街に出るだけでも「生きた英語」に触れることができるのは大きな留学の利点だった。例えばハンバーガー店での注文、パブでの店員との会話、バスの運転手に行き先を質問したり、時には陽気な通行人が興味を持って話しかけてくれたりと、英語を聞き取り話さねばならない機会が絶えずにやってくる。この状況は決して日本では体験できない、とても価値のあるものだった。

そのような会話の中で、マンチェスターの人々はとても友好的に我々に接してくれた。イギリス最大級の大学であるマンチェスター大学や、チャイナタウン、イスラム街を抱える街なだけあって、市街は東京以上に多国籍であり、市民は外国人の扱いに慣れているように感じる。街中で困ったことや分からないことがあれば、ゆっくりとした英語やボディランゲージで丁寧に教えてくれた。

４　まとめ

短い期間ではあったが、語学力の面のみならず、積極性や行動力など精神面においてもこの 5 週間の留学が及ぼした影響は大きい。このように有意義な経験から得たものをこれからも持続・発展させ、今後の進路を考えるうえでの糧にしていきたいと感じた。

マンチェスター大学語学研修を終えて

文教育学部　言語文化学科　1 年　小川諒子

授業内容

授業スタイルは日本と大きく違い、先生が板書したものをノートに写すことよりも少人数のグループを作ってその中で自分の意見を述べたり、先生の質問に口頭で答えたりということの方が多かったです。そのためクラス自体も少人数で、多くても 15 人というところでした。授業は 2 種類あり、ひとつは英文法、もうひとつはイギリス文化を学ぶ授業でした。英文法の授業では習慣を述べる文や仮定法を英語で学びました。イギリス文化の授業ではフットボールや産業、美術などについて学び実際にそれらに関する博物館や美術館に行きました。私のクラスには日本人、特にお茶大生が多かったのですが、サウジアラビアや中国からなどの留学生もおり、普段耳にすることの出来ない、いわゆる外国訛りのある英語に触れることが出来ました。クラスメイトも英語のネイティブスピーカーでは無いため自分の使う単語を相手が知らなかったり、ネイティブの様に自分のつたない英語を推測してくれるということが無かったりしたため、「正しい英語」の他に「伝わりやすい英語」を意識して話す必要性も感じられました。

放課後・休日

放課後や授業の無い金曜日の午後、土日はマンチェスター市内を観光したりロンドンやヨークなどに観光しに行ったりもしました。右の写真はヨーク観光の際に見学したヨークミンスターです。

大学が提供している無料のバスツアーもあり、それに申し込んでウィットビーや湖水地方に行ったりもしました。バスツアーは目的地についてからは自由行動だったのでとても良かったです。バスツアーの他にも大学の建物内での国際交流イベントもあり、授業での接点がない留学生と知り合うことも出来ました。

マンチェスターでの生活

マンチェスターでは大学がいくつか所有している寮の中の Oak House という寮で生活しました。大学まではバスを使うことも出来ますが、歩いて通うことも出来、そこまで遠く

ない距離にあります。普段の食事は自炊で、寮の近くの大きなスーパーや通学路にある野菜の安いスーパーを主に利用していました。寮では 7 人で 1 つのキッチンを使いました。調理器具はあまり多くありませんが、コンロやオーブンの数は多いため 2、3 人が同時に調理することは可能でした。

普段は自炊でしたが、大学や寮の近くにカフェやファストフード店が多くあったので外食をすることも出来ました。やはりイギリスのカフェだからかフィッシュ・アンド・チップスやイングリッシュブレックファーストを提供している店が多かったです。

スーパーやカフェに限らず街を歩いていても感じたことですが、様々な民族の方が居られたことが印象的です。イギリスなのでもちろんヨーロッパ系の方が多いのですが、アフリカ系やインド系と思われる方も多く居られました。日本に住んでいると「周りの人はほぼ日本人」という環境に慣れてしまうので、身の周りに様々な民族の方が居るということは新鮮でした。

しかしイギリス在住の方にとって東アジア人は珍しいのか、マンチェスターの方々がフレンドリーなことも手伝って、よく声をかけられました。その際、彼らにとってアジア人と言えば中国人を思い浮かべるようで、必ず”Are you Chinese?”や「ニーハオ」と話しかけられました。道を歩いている時の軽い挨拶として「ニーハオ」と挨拶された時、私はどう返事をすれば良いか迷いました。すれ違った人との挨拶なため「すみません、私は日本人です。」と訂正する時間はありませんが、「ニーハオ」と返すことには少し抵抗がありました。決して中国人と思われることが嫌だということではないのですが、「ニーハオ」と返すと私は日本人なのに「私は中国人です。」と言うことになるように思われたからです。しかし「こんにちは。」と返しても相手が日本語を知っているとは限りませんし、考えすぎかもしれませんが、”Hello.”と返すと、相手の母語で挨拶をしようとしてくれた現地の方の心配りを無下に扱うようにも感じられました。結局上手な返し方は思いつきませんでしたが、日本から遠く離れた地で自分はどの様に見られるのか、そして自分はどう振る舞うべきか考える良い機会になったと思います。

マンチェスター研修を通じて学んだこと

比較社会文化学専攻 生活文化学コース 上野真歩

わたしは、マンチェスター大学で 5 週間のプログラムに参加しました。ここでは、現地で学んだことを「授業」と「課外活動」のふたつに分けて報告いたします。

授業

授業では主に学術的な英語の使い方を勉強しました。わたしのクラスには日本人は少なく、多かったのは中東出身の方々で、これからイギリスで修士号や博士号を取得されることを目指されている方がほとんどでした。すでに結婚されていたり、子どもがいたりと「学生」と言っても背景の違う方々とクラスメイトになるというのは、日本ではなかなか経験することのない状況だったと思います。専門分野はそれぞれ異なり、お互いの研究について話すこともありました。また、授業時にこれから大学院生になる留学生向けの講義にも参加することもできました。講義の内容やそのやり方も興味深かったのですが、講義後、その内容を題材にクラスメイトと話し合いをするのはそれぞれ違った視点で物事を見ているということが分かり刺激になりました。

課外活動

このプログラムに、わたしは大学院生という立場で参加することにしたので、学部生のときだったらしなかったであろうことを積極的にやってみることに決めていました。そこで実践してみたことは、自分の専門である「服飾」に関わる博物館をできるだけ多く見学したり、職員の方に話をうかがってみたり、イベントに参加したりすることです。マンチェスターは産業革命期に急成長した街で、当時コットンの生産が盛んだった場所だったので、自分の考えた目標にとって最適な場所だったと思います。

市内の Museum of Science and Industry では当時使われていた機械や、どのように糸ができあがるのか

図 1 Museum of Science and Industry: Textile Gallery

を、博物館の方が実演するのを見学しました。また、市内から電車で1時間ほど離れたリーズはウールの生産と仕立てで有名な場所なのですが、そこでも生産の様子や、かつての労働者の生活の様子を見学できました。コットンもウールも日本ではあまり大きくならなかった産業なので、国内での見学が難しく、イギリスでこれらを学べたことはよい経験になりました。衣服そのものを専門に扱う Costume Museum、アートとしての衣服を扱う Whitworth Museum や Manchester Art Gallery など、日本では博物館と結びつきにくい衣服の展示を見られたことも自分自身の専門分野を考える上で価値のあることだったと思います。

図 2　Gallery of Costume

Manchester Art Gallery で開催されていたイベントに参加したこともやってみてよかったと思ったことのひとつです。このイベントは英語学習者向けに開かれたもので、それぞれの作品を見ながら何を感じるか、考えるかを参加者同士で話し合うものだったのですが、うまく説明できないところは主催の方に聞いたり、一緒に参加している方々と考えたりして、あっという間に2時間が過ぎていきました。学校の授業では出会わない国の出身の方（オマーン・コロンビアなど）と話ができたことはとても楽しかったです。

まとめ

わたしにとって、今回の研修は英語だけでなく、自分の価値観を考え直すという点においても、自分の専門について考えるという点においても有意義なものでした。授業は英語の能力を伸ばすことが一番の目標であっただろうと思うのですが、いわゆる大学における教養レベルの内容を扱っていたので新しい知見を得るということに関しても十分に学べたように思っています。このプログラムを通して、英語の継続的な勉強がこれからも必要だと改めて思っただけでなく、自分の専門について考え直したり、これからのことをじっくり考えたりできたことも、参加してみてよかったことのひとつです。2年間という限られた大学院生活のうち、1か月を投じるだけの意味のある留学になるかどうか、行ってみるまでは不安だったのですが、今はそれに相応しいだけのことができたと思っています。そう思えるだけの根拠が具体的にどこにあるのかはわかりませんが、少なくとも学外で何かしてみようとあれこれ試してみたことは悪くない選択だったのではないでしょうか。

マンチェスターでの研修を終えて

文教育学部 言語文化学科１年 中西麻梨子

このプログラムに応募した主な理由は、英語力を向上させたかったというのはもちろんありますが、何かに挑戦することによって自分を変えたい、という気持ちがあったことが大きかったような気がします。今まで自分の可能性を勝手に決めつけて、多くのことを自分には無理だとやる前から諦めてきた私でしたが、今回はそんな自分を変えるために挑戦してみようと応募を決めました。

研修内容について。初回にテストを受け、レベル別にクラス分けをされました。月曜日から木曜日は１日３コマ、金曜は午前中の２コマだけ授業がありました。月曜と水曜の午前、火曜と木曜はコア英語の授業でした。テキストに沿った内容で、会話の練習としてのペアワークが多かったです。私は会話が苦手だったため大変ありがたかったです。最初は意見を言うことは出来ても理由を求められると詰まってしまいがちでしたが、慣れてくると簡単にではありますが自分から理由を説明できるようになれました。
月曜と水曜の午後と、金曜はターゲットモジュールの授業で、イギリスの文化について学びました。金曜は毎週マンチェスター内のどこかへ出かけました。図書館、博物館、美術館などに行きました。金曜を毎週楽心待ちにしていました。

滞在先について。大学の寮で生活をしていました。ルームシェアという形でした。キッチンに行けばフラットメイトがいて、談笑をすることができ、共同生活は毎日が本当に楽しかったです。フラットメイトのおかげでホームシックにもならずに済んだように思います。日本とは勝手が違う部分もいくつかあって最初は戸惑いましたが、案外すぐに慣れるものです。あまり不便だと思う部分もなく過ごしやすかったです。寮の設備も充実していました。

現地生活について。平日の放課後は基本的に地元のスーパーで買い物をし、寮に帰って料理をしていました。普段自炊をする機会がないため新鮮でした。自立するいい機会にな

ったと思っています。放課後にアフタヌーンティーを楽しんだ日や、大学の近くの自然が豊かな公園で遊んだ日もありました。マンチェスターには大きなショッピングモールがいくつかあって、そこに行くこともありました。休日は旅行に行きました。ロンドン、リバプール、ウィットビー、湖水地方を観光しました。窓口で電車の切符を買う時は、きちんと英語を通じさせて正しいものを買うことができるだろうか、と不安でしたが、買えた時は本当に嬉しかったです。旅行中は場所など分からないことが多くて嫌でも現地の人に自ら話しかけなくてはならない機会が多々ありました。そのおかげで度胸がついたように感じます。英語でコミュニケーションをとることの喜びを感じられたのも私は主に旅行中でした。現地の人々は気さくな方が多くて助かりました。

この５週間の研修は、私にとって貴重な経験となりました。行く前は不安なことだらけでしたが、今では参加して良かったと心から思います。無理だと決めつけずに、何事も挑戦してみることが大切なのだと学びました。マンチェスターで過ごした日々は最高の思い出です。この研修に携わった全ての方々に感謝いたします。ありがとうございました。

初めての海外生活

生活科学部人間生活学科 生活社会科学講座 2 年　中村万希子

1. 研修内容について

初日のテストを基に 3 段階 10 のクラスに別れ、1 クラス 10 名前後で授業を受けた。私たちが滞在した時には、韓国・中国・中東諸国の学生が在籍していた。

1 回 1.5 時間の授業を週 14 回受講する。大学は 9 時半に始まり、1・2 限の間に 30 分、2・3 限の間に 60 分の休憩を挟み、15 時半に終わる。授業内容は一般的な英語力を磨く授業と英国文化及びマンチェスターの歴史に触れる授業の 2 種類があり、前者は週 10 コマ、後者は週 4 コマであった。前者では英語で会話することを重視した。文法や単語、リスニング、リーディング、ライティングについて学ぶこともあった。授業では常に英語であるため、リスニング能力と会話能力が鍛えられる。文法やライティングについては、日本での学習以上の内容を学ぶことができた。また、チュートリアルの時間には先生と一対一で会話し、授業に関する要望を伝えることもできる。後者の英国文化の授業では、フットボール、音楽、BBC、マンチェスターの歴史について英語で学んだ。週 1 回は近くの博物館等を訪ねる校外授業が行われた。

2. 滞在先について

大学寮であるオークハウスという寮に滞在した。シェアルームになっており、各自の部屋とフラットの 7 名前後が共同で利用するシャワーとキッチン、トイレがある。各自の部屋には大きな机とベッド、クローゼット、洗面所があった。共同のキッチンにはフライパンなど主要な調理器具と食器が置いてあった。洗濯は簡単なものは手洗いし、それ以外は敷地内にあるランドリーを利用した。フラットは全員日本人であるため、住環境での外国人との交流は難しかった。寮から大学の授業を受ける建物までは徒歩で 45 分と少し遠く、バスに乗れば 25 分程度であった。殆どの学生が Magic rider の 1 週間乗り放題のバスチケットを買って通学した。食糧については、寮周辺にはコンビニのような TESCO やセインズベリーという大きなスーパーがあるため、特に困ることはなかった。基本的には皆自炊をし、サンドイッチ等をタッパーにつめて昼食にした。衣服や本などは、バスの終点であるピカデリーガーデンに行けば買うことができた。

3. マンチェスター及びイギリスでの生活について

留学を通してイギリスで暮らす中で日本と異なっていた点をいくつか紹介する。まず、交通手段である。東京をはじめ日本の場合、短距離移動にも電車はよく利用される。しかしイギリスの場合、基本的な移動はバスで、電車は専ら長距離移動に利用される。バスは市民の足となる重要な存在である。二つ目は、様々な人種・国籍の人が生活している点だ。マンチェスターはイギリスの中でも独特な街で、中華系・アラブ系の割合が他都市と比較しても高い。中華街やアラブ系・インド系の飲食店が並ぶカレーマイルがある。私は実際にアラビア文化に触れることは初めてだったので、レストランでの食事や買い物をするのは楽しかった。

その他、留学に関して懸念される事項について述べる。まず、イギリスの治安についてである。日本は世界的に見て最も安全な都市のひとつである。イギリスも治安はさほど悪くないが、知人が財布や携帯電話を盗まれたという話を向こうで出会った友人から聞いたので、日本にいる時以上には注意は必要だろう。次に食生活である。安すぎるお菓子と市販のサンドイッチ、惣菜を除けば、(あくまで私の主観だが)まずい食べ物は無かった。伝統的なパイを使った料理やクッキーはとても美味しかったが、高カロリーのため注意が必要である。友人について、私は当初留学メンバーに殆ど知り合いがいなかった。しかし、フラットメイトは私の誕生日会を企画してくれたり、同学年の友人とは毎週末でかけたりするほど、不思議なほどすぐに仲良くなれた。外国人の友人については、同じクラスのサウジアラビア人と仲良くなり、その人を中心にクラスでアラビア料理を食べに行くこともあった。しかし、クラスは日本人が多く、より多くの友人を作るには積極的な行動が求められる。実際に私は同じクラスの友人と共に、掲示板に「日本に興味がある人は話しませんか」などと書いたポスターを貼ったりして友達を作ったりもした。

私は毎週末イギリス各地に旅行に出掛けた。私は旅行好きだったため、湖水地方、リバプール、チェスター、エディンバラ、ヨーク、ロンドンなど多数の都市を訪れた。毎週土曜日に大学が無料の日帰りツアーを企画しているのでそれに参加すると安く済ませることができる。各地を訪れることでイギリスの歴史を学ぶことができたので貴重な体験になった。ロンドンにはバンクホリデーを利用し 2 泊 3 日で訪れた。名所を自力で訪れた他、現地の人と話すことができたのは良い思い出である。

4. 留学を通して学んだこと

日本は 2013 年に訪日外客数が初めて 1000 万人を突破し、今では出国日本人数とのアン

バランスを解消しつつある。しかし、イギリスと比較すればまだまだ少なく、居住者と言う点ではかなり少ない。たまたま留学後に京都を訪れる機会があったが、イギリスと比較すれば、まだまだ外国人には住むのはおろか、訪れにくい場所だと感じた。施設内や店での日本語のみの表記は多く、英語が堪能な人が少ない。実際に日本人と触れ合う機会も殆どない。今回の留学の経験で感じたことを今後の進路に生かしていきたい。

マンチェスター大学短期研修を終えて

生活科学部　人間生活学科　1 年　福田ほのか

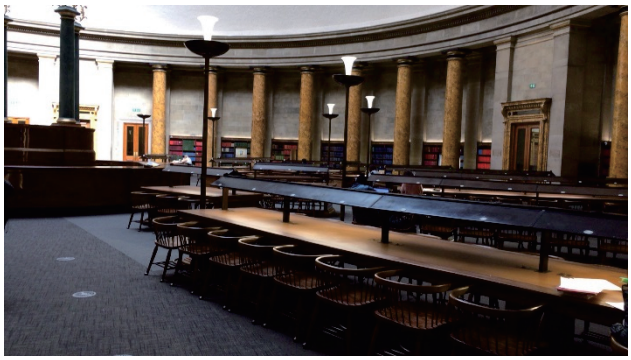
寮の生活

寮の部屋割りは他の留学生の滞在期間に影響され、人により様々でしたが、私は初めの 3 週間程、中国人の留学生とルームシェアをしていました。私が到着した時には他の部屋は全て埋まっていたので、わからないことなどは彼女たちに聞くことが出来ました。皆が気持ち良く生活するためのルールがあったりするので、疑問点は早いうちに確認しておくことが大切でした。放課後はあまり寮に籠らず、近くのレストランやスーパーに足を運んで、積極的に英語を使うようにしていました。

授業内容

習熟度別の 10 人程度の小クラスにわかれて、Listening, Speaking に重点が置かれた授業を受けました。このクラスは年齢も国籍も様々な生徒で構成されていたため、英語の技術はもちろん、思考の違いに驚かされることが多々ありました。クラスメイトとペアで話し合うことが多いため、わからない単語を英語で説明する練習を放課後に繰り返しました。また、より専門的な内容のレクチャーを受ける機会も数回ありました。この授業では、細かい内容までわからなくても、大まかな内容を、メモを取りながら理解することで、Listening 力が鍛えられました。

放課後

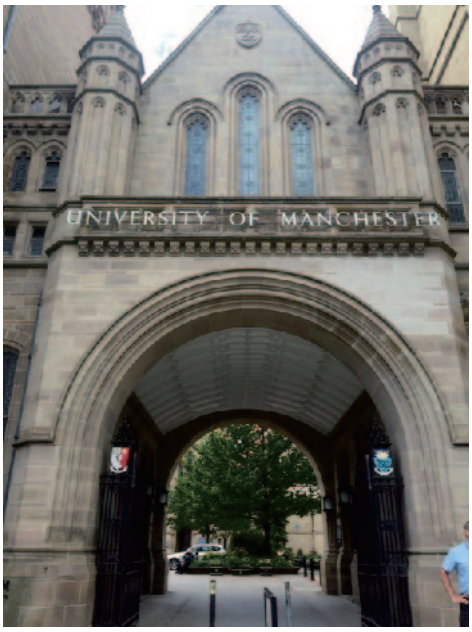


平日は授業が 15 時半に終わるため、放課後の時間を有効に使うようにしていました。マンチェスター大学周辺には、図書館、美術館、博物館など、無料で利用できる公共施設がたくさんあります。特に大学から徒歩 15 分程の中央図書館には、天井が大きなドームになっており、ずらっと円形にデスクが並ぶリーディングルームがあり、放課後授業の復習や課題を集中してやる場所として活用しました。

マンチェスター短期研修に参加して

生活科学部人間生活学科１年
田中冴季

研修に参加した動機



元々海外旅行が好きであるというのも一つの大きな理由ですが、やはり一番の理由は以前からスピーキング力を向上させたいと思っていたためです。また今までひとり暮らしというものをしたことがなく、生活力をつけたかったからです。そして内気な性格も、海外の積極性の中で生活をしていれば、変えることができるのではないかと思ったためです。

研修プログラムの内容

初回にクラス分けの試験があり、少人数のクラスで授業が行われました。二つの授業コースがあり、１つはリーディングやライティング、文法などを中心とした授業で、その中でプレゼンテーションのやり方を教わりました。特に印象に残った授業はマンチェスターの街の人にインタビューをしに教室の外に出たことです。現地の方々は非常に優しく、インタビューの相手を探している時も、相手の方からどうしたのかと聞いて下さりました。もう１つはスポーツや産業などイギリスの文化について学ぶ授業で、毎週１つのテーマについて学び、金曜日にはマンチェスター市内にある図書館や博物館に実際に訪れました。授業を受けていて思ったことは、やはり日本人は他の国からの留学生よりも控えめだということでした。

大学寮

寮は日本人だけのフラットでした。日本人だけというのは少し残念だと思いましたが、キッチンなどは共用ですが、ひとり部屋であるということもあり、ストレスを感じなかったという点で初めての留学にはちょうど良かったと思います。自分で食事を作ったり、スーパーに買い物に行くなど日本ではほとんどやったこともなかったことができて、良い経験となりました。

週末

研修中には４回の週末があり、学校で用意されたウィットビーと湖水地方、自分たちでヨークとロンドン、エディンバラに行きました。自分たちだけで旅行をすることは、電車のチケットや観光する場所、ホテルを自分たちで予約をすることとなり、計画性や積極性を養えたと思います。

研修を通して学んだこと

同じクラスには、途中で入れ替わりもありましたが、韓国やサウジアラビアなどの国からの留学生がいました。今回の研修で、イギリスだけではなく他の国の文化の違いも学べたことは、大きな経験だったと思います。そしてそのことにより自分の文化についても再確認出来ました。またこれからの自分の英語の課題がわかり、英語学習への意欲を高めることができ、様々なことを見たり経験したことによって自分の視野を広げられました。

マンチェスター研修を終えて

文教育学部言語文化学科２年　富永祥代

８月２日から９月６日まで、イギリスのマンチェスター大学にて５週間の語学研修に参加しました。中学からこれまで約７年間英語を勉強してきたものの、それを実践できるレベルにはまだまだ到達していないとかねてから実感しており、日本では生の英語に触れることはなかなか難しいと思ったため、この機会にと、夏休みを利用した今回の短期留学に参加することにしました。

授業

初日にクラスを振り分けるためのテストがあって、個人のレベル別にクラスが決まります。授業は語学の授業とイギリス・マンチェスターの文化についての授業がありました。語学の授業では、文法・語彙を学んだり、スピーキングの練習をしたりしました。文法は、高校時代に習ったことが多かったのですが案外忘れていたことが多かったので焦りました。また、英語で文法についたり、語彙について説明することがあって、日本で英語を勉強しているときにはない難しさがありました。授業中は、クラスの人と話しあったりすることも含めて、英語を話す機会をたくさん持てました。文化の授業では、授業時間を利用してマンチェスターにある色々な博物館などに行きました。

クラス

語学の私のクラスは半分が日本人含むアジア系で、もう半分がサウジアラビア・リビアからきたアラブ系の人たちでした。韓国・中国の子は私と同じような短期の語学研修にきた大学生だったのですが、アラブ系の方々はマスターに行くために英語を学んでいたり、もう結婚していて、こどもがいたりして、みんな私たちより１０歳とかそれ以上離れていたりして、歳が近い学生と一緒に学ぶことになると想像していたので、意外なことでした。国籍・民族・宗教・年齢・性別…それぞれ違った立場をもつ人たちとコミュニケーションを取れたのは、日本ではできない貴重な経験でした。クラスの人数は途中で帰る子もいたので増減があったのですが、１０～１３人くらいでした。お茶大以外にも他の大学から日本人の大学生がたくさんいました。中国・韓国の方達は私たちが来る前からいて、先に帰

ってしまって、日本人は他の大学からの学生が増えっていって、最終的にはクラスの半分以上が日本人になっていました。英国の文化の授業のクラスは１０人ほどで、こちらも最初の方はアジアだった中東だったり色々な国からきた人がいたのですが、最終的にはほとんどが日本人になっていました。 他の国の人と話すときは、お互い英語を学習しているもの同士で、また国よって訛りもあるので、最初は聞き取るのが大変でした。けれども、異国についてその国の人から直接話を聞けるというのはとても楽しかったです。

滞在先

マンチェスター大学の寮に滞在しました。８人１フラットで、個々に部屋があって、キッチン、バス・トイレは共用でした。部屋にはベッドと机、たんす、洗面台といったものが備え付けてありました。壁が薄くて、防音面ではいまいちなところもありましたが、適度にプライベートな空間を持つことができてよかったです。私のフラットはお茶大と日本のほかの大学から同時期にきている女の子たちの７人、と全員が日本人でした。共用のキッチンで各自自炊をしたり、一度フラットのみんなでピザパーティーをしたりしました。現地で外食をしようとすると（円安の影響もあったのでしょうが）かなり高くついたので、私はほとんど自炊してました。寮は私たちが授業を受けていた棟から徒歩で 40～50 分、バスで 15～20 分くらい離れたところにあったので、歩いていく人もいれば、バスに乗っていっている人もいました。

成果

ネイティブの人のように流暢に英語を操れるようになるのは非常に難しいと感じました。けれども、実際に英語を使ってコミュニケーションをとることに慣れることができました。それまでは、英語の運用というと日本人相手で、文法等があっているかを重視していて、コミュニケーションツールとしての認識が薄かったことに気づきました。また、初めての海外だったのですが、一ヶ月以上イギリスを満喫できてとても楽しかったです。

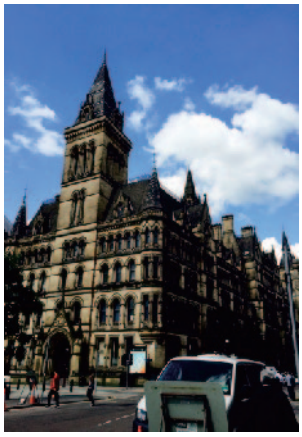
マンチェスター大学での研修を終えて

文教育学部　人文科学科　2 年　平野晴花

私は、イギリス・マンチェスター大学での夏季短期研修に参加しました。

私が留学をしようと決心したのには、主に 2 つの理由がありました。1 つは、もちろん自分の英語のスキルを向上させると同時に、外国での滞在と現地での交流を通じて異文化を理解することでした。そしてもう 1 つは、自身の内気な性格を改めることでした。私は以前から、見知らぬ人とコミュニケーションをとることや、人前で話すことが苦手でした。しかし、大学に入学してから、多くの初めて出会う人と接するようになり、発表をしたり、自分の意見を述べたりする機会が増えたこと、また就職後は更にそのような機会が増えると思われたことから、自身の苦手を克服する必要があると感じていました。もともと留学には興味があったので、自身の性格を改善する良い機会にもなるのではと思い、留学を決めました。大学が提供する夏季短期研修先はマンチェスター大学を含めて 3 校ありましたが、費用が一番少なかったこと、また私は大学で歴史を専攻しており、イギリス史に興味があったので、イギリスの歴史的な建築物や場所を実際に見てみたかったということなどから、マンチェスター大学での研修を選びました。

イギリスに到着した次の日からは、マンチェスター大学での研修が始まりました。初日は文法・作文のテストをした後に、先生との一対一の面接があり、その後研修の説明がありました。次の日からは授業が始まりました。授業は、英語を全般的に学ぶコア英語という授業と、イギリス文化を学ぶターゲット・モジュールという授業の 2 つがありました。各授業のクラスは、初日のテストと面接の結果で分けられました。コア英語のクラスには、私の他に、初週の時点ではサウジアラビア人 3 人、中国人 2 人、日本人 2 人が在籍していましたが、研修中に何度か入れ替わりがありました。コア英語には先生が 2 人いて、交替で授業をしてくれました。コア英語の授業では、テキストや、時にはゲームを通じて、文法のおさらいや、初めて知る表現や熟語を学び、また、意味が似ている表現の使い分けを知ることなどができ、大変勉強になりました。授業の内容に関連したテーマについて、クラスメイトと話す活動も多く、外国からの留学生と沢山話すことができました。彼らとの交流を通じて、彼らの国の文化や考え方を知り、出身国によって英語の話し方に異なる癖があることも分かりました。また、私自身のことや日本のことを、彼らにどうやって説明すれば理解してもらえるのかを考えて英語を話したという経験は、自身にとって非常に有益なものになったと思います。研修の中盤には先生との面談があり、面談後は生徒の意見を反映した授業を行ってくれました。また、エッセイの書き方やプレゼンテーションの方法な



ども教わり、どちらも今後も役に立つものでした。特にプレゼンテーションでは、研修中に 2 回プレゼンテーションを行う機会があり、私はプレゼンテーションに苦手意識があったのですが、先生やクラスメイトのサポートもあり、何度も練習を繰り返して、何とか成功させることができました。この経験は、私にとって大きな自信になりました。ターゲット・モジュールのクラスでは、毎週金曜日の授業で校外のイギリスの文化やマンチェスターの歴史に関する、主にミュージアム等の場所に出かけ、その週のそれ以前の授業で、出かける場所に関連する事柄について、ディスカッションをしながら学びました。この授業では、イギリス英語特有の表現や熟語なども学び、興味深かったです。どちらの授業でも、英語を話す場面が沢山あり、積極的に英語を話そうとする気概が身につき、以前よりも自分の話す英語に自信が持てるようになりました。

滞在中は、大学の寮で生活をしました。私が滞在したフラットでは、お茶大生しかいなかったので、リラックスして過ごすことができました。スーパーでの買い物や、ランドリーでの洗濯、シャワーなど日本の自宅とは勝手が違い、戸惑うこともありましたが、良い経験になりました。

研修中は、授業時間以外に自由な時間が多くあったので、様々な場所に行きました。平日は、マンチェスターにある博物館や教会、レストラン、カフェ、パブなどに出かけたり、ショッピング街で買い物をしたりしました。週末には、イギリスの各地を旅行しました。湖水地方、リバプール、エディンバラ、ヨークなどを訪問しましたが、特に印象に残っているのは、やはりロンドンです。ロンドンでは、それぞれの行きたい場所や廻る順番が違っていたために、行き帰りの電車やホテルなどでは友人と一緒でしたが、それ以外では一人で行動しました。短時間ではありましたが、外国での一人旅を緊張しながらも無事成し遂げることができ、達成感を感じました。また、ロンドンの多くの歴史的な建築物や、有名な資料を見ることができたことは、一生の思い出になると思います。マンチェスター内外で、多くの日本とは異なる点を発見し、そのどれもが新鮮でした。また、イギリスで接した人のほとんどが非常に親切な人達であったことも印象深いです。マンチェスターは、イギリス人だけでなく、留学や仕事でマンチェスターに住んでいる外国人が多くおり、非常に国際色豊かな街でした。彼らは積極的に私たちとコミュニケーションをとってくれたり、私たちが困っている時には助けてくれたりして、とても有難かったです。これは、マンチェスター外の場所の人たちも、同様でした。

1 ヶ月という短い期間での研修でしたが、貴重な経験を沢山し、非常に多くのことを学びました。また、自身の性格を大きく改善することができたと思います。この研修で得たことを、今後も活かしていきたいです。

夏季海外研修@マンチェスター大学　帰国報告書

文教育学部　言語文化学科　仏語圏言語文化コース　２年　保住綾那

研修内容

マンチェスター到着日の次の日にクラス分けテストがあり、Core Language Module と Target Module、２種類のクラスを受講した。Core では文法事項を確認し、リーディング、リスニング、ライティング、スピーキングをした。授業では、常に発言が求められ、アクティビティごとに、近い席のクラスメイトとディスカッションがあった。また、２回クラスメイトの前でプレゼンテーションを行った。これらにより、１か月という短期間ではあるが、スピーキング能力向上及び、英語で話すことへの抵抗感の軽減が確実に達成されたと感じている。また、このようなスピーキングに重点を置いた授業内容を通じて、海外の友人を作る機会ができた。Target では、各自がそれぞれ役を与えられてスピーキング練習をする、ロールプレイをした。私のいたクラスでは、投資家と発明家に分かれてディスカッションをした。他には、ミュージアムを訪れて、事前に与えられた課題に沿って館内を回り、次の授業でその報告をした。両方の授業で、語彙や文法の確認、リーディング、リスニング、ライティングをしたが、全体的に、スピーキングが重視されている感じを受けた。研修期間は８，９月と現地の大学が休暇中に行われるため、英国出身の学生と交流する機会は授業を通してないが、アラブ系やアジア系の学生と交流する機会がもてた。

滞在先

授業を受けた建物から、徒歩約４０分、バスで約２０分の所にある大学寮に滞在した。バス停が寮の向かいにあったので、１週間のバスパスを購入して登校いている人が多かった。キッチン、トイレ、風呂は共同であり、フラットのメンバー全員が綺麗に使うよう心掛けていた。キッチンに一通りの調理器具がそろっていたが、包丁とまな板は購入した。個別に購入したとしても、飲み物や香辛料など１部の食品は共同用にしていた。１つのフラットにトイレと風呂は２つずつあり、風呂はシャワーのみのものと、バスタブ付きのシャワーの２種類あった。ラウンドリーが寮のエントランス付近にあるので、洗濯はいつでもできた。買い物はたいてい、通学路の途中にある Poundland か Sainsbury’s で済ませた。

現地生活

寮の側には、広大な公園があった。登下校中、気まぐれにその中を通って、目が合ったジョギングをしている人に“Good morning”や“Hello”と挨拶するのが楽しかった。本屋に何度か買い物にいった時、会計時に店員に笑顔で“Thank you”と言うと、向こうも笑顔を返してくれるのが嬉しかった。寮から近くの大きなスーパーへ行く途中のバーガー屋の店主が、“I love tomatoes”と言ったら、バーガーにトマトを多めに入れてくれた時、心が温かくなった。このように、1か月のマンチェスターでの生活で、私は数々の小さな幸せを見つけた。週末には旅行をした。大学が提供していた旅行で、リバプールとホイットビーへ、3連休だった最後の週末は、個人的にお茶大生の友人たちとロンドンへ行った。大学でのイングリッシュプログラムを通して以外にも、このような旅行を通しても英語の運用力を鍛えることとなった。金曜日は午前で授業が終わるので、お茶大生の友人たちとパブへ飲みに行った。私はお酒に詳しくなかったので、店員に英語でどのようなお酒が飲みたいか説明すると、どの店でも、きちんと私の注文に合うお酒を教えてくれた。他の客が待っていても嫌な顔一つせずに教えてくれたので、その優しさにバーガー屋での出来事と同様に心が温かくなった。語学研修中に仲良くなった、中国、サウジアラビア、イラクの学生とはWhatsAppというLINEのようなSMSを通じて、今も時々連絡を取り合っている。もちろん英語で。さらに、他大学の日本人学生とも親しくなり、彼女は私よりも長くマンチェスターに滞在する予定なので、彼女の英語向上のためにも、LINEを通じて英語で連絡を取り合っている。これらのことを通して思ったことは、私はコミュニケーションが得意ではないが、英語にせよ、日本語にせよ、相手のいうことに真剣に耳を傾け、理解しようとし、また自分自身も伝える努力を怠らなければ、言語や背景の違いなどに妨げられることなく意思疎通はできるし、友好的な交流も可能だと感じた。

UNSW
THE UNIVERSITY OF NEW SOUTH WALES

Australia

参加者３名

素敵な出会いに感謝して

文教育学部　グローバル文化学環２年　青木奈都実

今年の夏休みは、この短期留学のおかげで、私の人生において一生忘れることのできない体験ができました。シドニーで触れた異文化や、シドニーで出会った多くの人々のおかげで、私自身留学前よりも大きく成長できたことを実感しています。

語学学校

オーストラリアに到着した翌日から４週間、早速語学学校が始まりました。UNSW 付属の語学学校で、文法問題、リスニング、リーディング、プレゼンなど、レベルの高い英語を学ぶことができました。私のクラスはほとんどが日本人でしたが、少数の日本人以外の生徒の発言力や積極性に刺激を受け、自分から学ぶ姿勢も身につけることができました。

インターンシップ

４週間の語学学校が終わった後、２週間のインターンシップが始まりました。シティから少し離れた中高一貫の男子校で、日本語教師のアシスタントをしました。毎日早起きをして、フェリーに乗って、オペラハウスやハーバーブリッジを眺望しながらの贅沢な通勤に、とても興奮しました。それとともに、男子校に行って日本語を教えるというハードルの高さに不安を覚えていました。しかし、今回の研修の私の目標のひとつ、“積極的にトライする”という姿勢を崩さず、短い期間で生徒や先生と良いコミュニケーションを図ろうとしました。自分から積極的に話しかければ、生徒も話しかけてくれ、授業中に褒めるととても喜んで、もっと積極的に学ぼうとするなど、素直な学生が多く、その点で逆に私が助けられたこともありました。ただ、中には授業中にふざけたり、荒れている生徒もいて、どうしていいかわからなかったこともあり、今後はそういう事態への対処の仕方も学んでいこうと思いました。また、叱るときと生徒と楽しむときのメリハリをつける先生たちの教育の仕方を見て、信頼される先生の在り方を学ぶことができました。

日常生活

私のホームステイ先には、ホストマザーが一人しかいませんでした。彼女はとても明るく、チャーミングで、何より私をとても大事にしてくれる、こころの優しい方でした。彼女の兄弟やこども、孫たちが集まるディナーに参加させてくれたり、私が暇なときには公園やミュージカルに連れて行ってくれたりしました。また、彼女にはパートナーもいて、私も週に２回くらい一緒に食事をしました。彼もとても理解のある人で、私のためにいつもゆっくり話をしてくれたり、彼の実家に行き、ユダヤ人の伝統的なディナーにも参加させてくれたりしました。オーストラリアについた初日は、ホストマザーと何をしゃべったらいいか、どうしたら迷惑をかけないかなどばかり考えていて、勝手にストレスを抱え込み、早く日本に帰りたいとすら思っていました。しかし、ホストマザーは常に私と会話をしてくれようとしたり、テレビを一緒に見ようと声をかけてくれたりしたので、次第に私のこころも和み、私から今日の出来事を話したり、テレビを一緒にみたりするようになりました。彼女が家にいるときは、なるべく彼女と話して、多くの時間を過ごすことで、英語での日常会話ができるようになりました。このような素敵なホームステイ生活を体験できて、私はラッキーでした。ホストファミリーには本当に感謝しています。

友達

今回、UNSW の研修にお茶大から参加したのは、私を含め３人で、はじめは心細かったのですが、その人数の少なさのおかげで、わたしたち一人一人が現地学生と深いつながりを持つことができました。UNSW の、日本に興味をもっている学生サークルのイベントに、積極的に参加して、たくさん友達を作りました。英語でしかコミュニケーションがとれないとなると、何度も聞き返してしまったり、ジョークが通じなかったりと、困難なことはたくさんありました。初めは、自分の英語が拙いと相手に迷惑だろうと思い、積極的なかかわりを持とうとしませんでした。しかし、私の友達が本当に積極的に話しかけ、通じない時があっても、楽しそうに会話をしているのを見て、言語の壁が多少あっても、友達を作ることはできるのだと気づきました。そこから私も積極的にコミュニケーションを図るようになり、こちらが友好的な態度を見せれば、あちら側もそのような態度で返してくれることを学びました。最終的には、本当にたくさんの学生が、帰国

の日に、わざわざ空港まで送ってくれ、たくさんのメッセージをくれました。そのうちの何人かとは時々スカイプをしたり、ラインを交換したりと、いまだに連絡を取り合っています。距離としては遠く離れていますが、SNS を使って、今でもあのときと変わらない関係を保てているのはうれしいし、とても彼らが恋しいです。このように思える友達が海外にできたことは、本当に喜ばしいと感じます。
オーストラリアでの多くの出会いに感謝し、たくさんのサポートを受けた分、どこかで恩返し出来たらと思います。また、私たちを陰で支えてくださった担当の先生や、エイジェントの方、家族にも感謝しています。貴重な体験を本当にありがとうございました。

ＵＮＳＷ研修を終えて

生活科学部　人間生活学科　生活社会科学講座３年　吾郷里穂

今回の研修では計６週間のオーストラリアへの滞在中に、ニューサウスウェールズ大学付属語学学校での英語学習を４週間とインターンシップを２週間行いました。

英語研修について

初日にクラス分けがありました。アカデミック英語、一般英語、法学用英語コースからの希望とテストの結果を鑑みて、コースとクラスレベル（レベル１～６）を学校側が判断します。私は一般英語コースだったのですが、学習面で良かった点は州立大学付属の学校だけあって講師のレベルが高かったことです。学生の発言を引き出してくれ、ほぼ常にディスカッション状態の授業でした。意見を尊重しながら英語を修正してくれるので主体的に学べます。またプレゼンテーションの機会が週に１回あったので適度な緊張感も保つことができました。難点はクラスで国籍に偏りがあったことです。学力が同等であること、時期的に日本の大学が休みであることから私のクラスも日本人が多かったです。対策として私たちは日本人の間でも英語での会話を徹底し、他国籍のクラスメイトとのコミュニケーションを重視したことで、この弊害は免れました。

生活面で良かった点としては、日本人学生生活サポートが充実していたので安心して暮らせたこと、メインキャンパスの学生との交流があったことです。大学付属なので、外国籍の生徒だけでなくネイティブの現地学生と友達になれたのも非常に大きな収穫でした。特に日本文化サークル（NSA）のメンバーが非常に親切にしてくれ、毎日のように一緒に出掛けました。このサークルは 100 人以上が所属する大きな団体で、今までもお茶大生が研修でお世話になっているそうです。この中で親しい友人もできて、空港で別れる時は辛かったです。今も Skype や Facebook で連絡を取り合っています。

インターンシップについて

インターンシップは、日本語教師アシスタント、観光クルーズのレストランホールスタッフ、動物園、海の家兼サーフィン専門店、旅行会社、など多くの選択肢から選ぶことが出来ました。オリエンテーションが出国前後合わせて６回あり、グローバル人材や異文化理解と

は何かを考え、留学の目標設定を行うことで意味のある留学にするためのサポートが整っていました。私のインターンについてですが、午前中は小学校のキャンティーンで働きました。保護者のボランティアで成り立つ給食場兼購買のような場所です。そして午後や休日は日系の旅行会社でインターン生として研修を受けました。世界遺産へのツアーや市内観光に参加し、現地観光会社のセールスのトップにインタビューしたり、旅行会社の仕事について説明を受け、最後には学生向けのシドニー観光 PR を作成しました。

まずキャンティーンでの研修について。私の専門は家族社会学・生活経済学なので、保護者の方からオーストラリアの家族の現状を伺おうと意気込んでいたのですが、語学学校とは違うネイティブの会話速度に戸惑いました。手早く作業をこなしながら、会話をリスニングし、新しい保護者と仲良くなるべく会話に食い込む隙を探すには努力を要しました。それなら会話を自分で始めよう、と自分から話しかけることで最終的には６人の父親・母親に子供の教育方針についてインタビューできたのは収穫でした。

旅行会社では日本人向けの世界遺産観光ツアーに同行させてもらった日があったのですが、久々に会う日本人の団体にオーストラリア人との違いを感じ、両者の長所と短所を改めて確認する機会になりました。また、観光ガイドの方は在豪日本人なので、名所の情報を紹介するだけでなく日本人から見たＮＳＷ州政府の特性やオーストラリア人の国民性を解説していて、私がシドニーで考え感じてきた事を客観的に考える機会になりました。シドニーＰＲ作成にあたってオーストラリアにおいて重要なシドニーの歴史、都市としての特徴、人々の生活について観光を通じて学べたことは大変有意義でした。

ホームステイについて

私のホストファミリーは新婚の夫婦でした。マザーはフランス人で移住してまだ６年、ファザーはペルーとマルタをバックグラウンドに持つオーストラリア人でした。マルチカルチャーな家族に恵まれ、毎日フランスとオーストラリアと日本の日常における価値観の違いや食文化等について話し合うことが出来ました。オーストラリアは移民大国です。この国の平均的な家庭というのは無いのがオーストラリアの現状です。なのでテレビ番組では多様な国をバックグラウンドに持つシェフ達が各国の伝統料理で戦うトーナメント番組があったり、スーパーには世界各国の調味料や主食が並びます。小学校の子供たちに「私は日本人なの」というと、一見アジア系に見えない子供からも「私のおばあちゃんは中国人」「お父さんが韓国人」という声が聞かれました。マルチカルチャーに接する環境が身近にあったのはオーストラリアを体感できる幸運なことだったと思います。また、彼らには子供がいなかったので私とじっくり向き合って話をし、聞いてくれました。そのおかげで拙い英語でも積極的に政治、経済などの難しい話題にも挑戦することができ、ファザーとは食後１時間は

語り合っていたと思います。

感じた事

今回の研修に参加した目的は、日本では見られないオーストラリア人の日常・文化を知ることで日本の固定観念を破ることでした。オーストラリアはアジアからの移民も多い国なので最初の印象は“日本と似ている”というものでしたが最後には“日本と逆”だという結論に至りました。人口の構成、国の資源、経済状況、歴史ほぼすべてにおいて違うと思いますが一番はモノカルチャーの日本と違うマルチカルチャーな文化だと思います。大雑把な対応もフレンドリーな国民性も、オーストラリア人が時間をかけて培った多文化に寛容な態度、器の大きさなんだと感じました。

UNSW 語学研修とインターンシップに参加して

生活科学部人間環境科学科 1 年　高村泉水

今回の研修では、UNSW の付属語学学校に 4 週間通い、その後ハイスクール(オーストラリアでは中学、高校がひとつになっている)で日本語教師のアシスタントを 2 週間経験しました。また、ホームステイもさせていただきました。

語学学校では、20 人くらいのクラスで主に午前中英語の授業を受けました。日本は夏休みで日本人大学生がクラスの半数ぐらいを占めていたので、休み時間は違う国籍の人に話しかけるようにしました。授業で扱うことは高校までに習ったことでしたが、どの先生も声に出す場をたくさん与えてくださって実用性に重点を置いた練習ができました。クラスの人数もそれほど多くなく、先生はフレンドリーな方ばかりで単語の意味など些細なことでも質問でき、発音の指摘などもしてくれました。また、その頃偶然開かれていたオープンキャンパスで専門的な話を伺ったり、学部の講義に参加して、正規の学生になるならどれだけ英語を上達させる必要があるかを痛感しました。

インターンシップ先のハイスクールでは、日本語の先生（オーストラリア人）の授業のサポートをしながら、先生の仕事や授業の様子を見せていただきました。授業中に生徒たちがそれぞれのレベル別に違うことをしているのと先生が授業を楽しくしようとイベントやゲームなどを頻繁に取り入れていることが私にとって新鮮で印象的でした。また、生徒たちの前に立つ経験をしたことで少し度胸がついたと思います。

ホームステイをさせていただいた家庭は両親と姉弟の 4 人家族でした。料理は米が少なくてチキンが多く多国籍料理といった感じで、どれもおいしくて合わない料理はありませんでした。スポーツを楽しむ家族で、家にプールとバーベキューグリルがあり、父の日に親戚一同 17 人が集まって朝からホームパーティーをしていたこともありました。これらは、ほかの家でもあることだそうで余暇を大事にする国民性が見えました。

休日や放課後には、大学の日本に興味がある人たちのサークルに何度か参加させてもらい、ビーチを巡ったりお花見に行ったりしました。そこで知り合った人たちと何度か出かけたりもしました。日本のことをよく知ってくれていたおかげで話題も多く、わからないことも教えてくれて本当に優しくしてくれました。私も日本に来る留学生の気持ちが今回少し

わかったので、同じように気遣えるようになりたいです。

オーストラリアの日本との違いを1番感じたところは多民族国家であるところです。オーストラリアではほとんどの人が親や祖父母など近い世代に違う国のバックグラウンドを持っています。だから、“普通のオーストラリア人”というイメージがないそうです。人それぞれ違うことが当たり前に受け入れられていていいことだなと思いました。一方、“外国”という先入観を持っていた私にとって、常識が覆されることはそんなにないし、もともと抱いていたイメージよりと日本と似ていることも多々あって親近感がわきました。

英語に関して、生活に必要な最低限の対話をするだけならときには不自由はあれどそれほど難しくはありませんでした。しかし、100%聞き取れないのが悔しい、もっと深い会話をしたい、難しい講義を聴きたい、とたくさん思うことがあったのでもっともっと数が必要だということを思いました。また、英語の環境でもネイティブの人たち全員が先生ではないので自分で修正する必要があること、一口に英語といってもなにができるようになりたいかによって集中すべきことは違うことに気付きました。けれど、おかしな英語を使ってでもどんどん言葉を出せばわかってくれるし、つたなくても友達としゃべることはいつも楽しかったです。加えて気づいたことは、留学前は英語の環境に飛び込めば言葉も上達すると思っていたのですが、言語を習得するには自分からしゃべろうとしないと始まらないということです。英語の問題だけでなく話をどう膨らまそうか、どうしたらもっと聞きたくなるだろうか、コミュニケーション能力も上げなくてはと思いました。上達したこと以上にすべきことの発見が多かったのですが、実際に英語をたくさん使ったことでためらわなくなったし、これからどこを直していきたいかより現実的なゴールが見えました。

この留学で私の変化は、自分の行動を反省して何かし損ねてないか何にチャレンジできるか頻繁に目標を確認する癖がついたところです。せっかくオーストラリアにいるのだから短い貴重な時間無駄にしないようにとしているうちに、自分が何をしたくて留学を思い立ったかよく自問自答していました。そもそも私が留学した理由は、英語力をつけたかったから、日本でない生活を経験したかったからといったことだったので、どうしたらもっと英語が使えるか、ここでしかできないことは何か、ずっと意識していました。着いてから新たな課題（たとえばコミュニケーション能力）も見つけました。逆に日本でできる事がある

と気づいたこともこの留学の大きな収穫です。短期研修の手配は学校の方がしてくれるけれど、そこでなにをするかは人それぞれで、もし何も考えていなかったらオーストラリアにいても何も得られなかったなと思います。

今思う留学してよかった事は外国としてのオーストラリアの具体的な世界を見たこと、さまざまなできないことを知ったこと、いつもと違う考えを持ったことなどです。違う地での生活で気づいたことは私にとって新鮮なことが多く、日本での生活のヒントにしたいと思っています。

SOAS
University of London

The United Kingdom

参加者 9 名

ロンドン大学 SOAS でのサマープログラム体験談

1510150　冨居智穂

①研修内容について

コースは English Language skills でした。授業は月曜から木曜までが 10 時から 15 時まで、金曜日が 10 時から 12 時までで、午前中がリーディング・ライティングの授業、午後がリスニング・スピーキングの授業でした。クラスの人数は 10 人でとてもアットホームな雰囲気でした。そのうちの半分が日本人でしたが、もちろん授業が終わる時間までは英語しか使ってはダメだったので、かなり英語漬けになれました。わたしはもともと英語のリスニングが苦手だったので、授業で先生から何か聞かれても一回では聞き取れないことや外国人のクラスメイトと話していても何が言いたいのかわからないことが何度もあって、プログラム初日、二日目などは、授業に行くのが憂鬱でした。でも、やっぱり英語をずっと聞いていると耳は割と早く慣れてくるし、わからないということを先生に伝えていると、ちゃんと授業についてきているかどうか気を使ってもらえるようになり、すぐに授業も楽しくなりました。専門科目ではなかったので、授業の内容はエッセイの書き方や相手の言葉を遮る方法、プレゼンの仕方、レクチャーでのメモの取り方など、専門分野について留学した時の練習、という感じでした。宿題では、エッセイの導入部分をワードで書いてメールで提出したり、BBC でシャーロックホームズのドラマを見てきたりとパソコンが必要になることが多かったです。最終授業は、リーディング・ライティングクラスでは５００字のエッセイ、リスニング・スピーキングクラスでは５分間のプレゼンをしました。プログラム中に習ったことをかなり生かすことができたので、自分の成長を実感できました。

② 滞在先について

ロンドン大学 SOAS の学生の大半が滞在している Dinwiddy House に滞在しました。５～７人で一つのフラットを構成し、キッチンが共有でした。冷蔵庫、電子レンジ、ガスコンロ、オーブンと簡単な調理器具がありましたが、あるものはそれぞれのフラットによって様々なようでした。汚いもの、古いものもあったので、私は冷蔵庫と電子レンジし

か使いませんでした。三週間だったのもあって、自炊はせずスーパーで冷凍食品や果物、パンなどを買って食べていました。自室にはトイレ、シャワー、勉強机、ベッド、衣装ケース、タンスがついていました。狭くはないですが、電気が小さく、夜になるとかなり暗いです。イギリスは９時前くらいまではかなり外が明るいのでそれまでの間に勉強していました。また、それぞれの部屋にフリーWi－Fi がありますので、寮では快適にスマートフォン、パソコンが使えます。洗濯機、乾燥機はこの施設にいる学生全員で共有で、カードに現金をチャージして使用することができました。けっこう費用が高かったので、わたしは４人でシェアしましたが、そうしている人はかなりたくさんいたように思います。できそうなものは手洗いして部屋干ししていました。フラットのメンバーが全員日本人だったのもあって、かなり仲良くなれて寮にいる時間は安心して気楽に過ごせてよかったです。

③ 現地生活・現地の人々について

イギリスは気候もちょうどよく、治安もよくて、本当に過ごしやすい国でした。夏なのに、朝と夜はかなり冷え込んで、コートがあってもよかったと思いました。でも、日中は寒すぎず暑すぎず、気持ちよかったです。お昼にはよくラッセルスクエアという公園でピクニックみたいにお昼ご飯を食べました。また、夜の 9 時前くらいまではかなり外が明るくて、外にいると時間を忘れてしまいました。9 時くらいからは一気に暗くなります。現地の人たちは本当に親切で笑顔がステキな人が多いです。スーパーや飲食店に行って英語に少しつまってしまっても、店員さんがみんなやさしく対応してくれるので安心でした。日本よりも、かなりフレンドリーで、たくさん話しかけてくれます。それから、現地のスーパーは広くて安くて日本にはないものがたくさん並んでいたので、楽しかったです。一回行くと思わず長居してしまいました。

ロンドン大学 SOAS でのサマープログラムを終えて

文教育学部　言語文化学科　１年　花岡瑞月

◆　**研修内容について**

私は国際関係学のコースを選択したため、「英語を学ぶ」というよりは「英語を使って学ぶ」という形での短期留学でした。

授業を受ける中で気がついたイギリスの大学と日本の大学との違いは、まず１つめに、自分の意見を述べる機会が多いこと。レクチャーのクラスは先生の解説を聞くのみなので別ですが、プレビュー・レビュー・ディスカッション・セミナーといったその他のクラスでは必ず発言を求められました。私は英語を話すのが本当に苦手で、英語しか使えない環境に飛び込むことでそれをなんとかしようと留学に踏み切ったので、最初のうちは意見を求められても何も言うことが出来ずとても辛かったです。そしてそれと同時に、いかに自分の知識が足りていないかを痛感しました。それぞれのトピックに関しての知識を持っていなければ、自分の意見を持つことすらできないのだと改めて気がつかされたからです。今までは大学での授業をただ受動的に受けていただけでしたが、もっと能動的に学んでもっと自分の頭で考えていかなければならないと思い直す良いきっかけを得ることができました。

また、もう１つ日本の大学での学びと異なっていて興味深いと思ったのは、自分あるいは日本の視点から国際関係を捉えるのではなく、イギリスという普段の自分とは違う視点から国際社会の動きを見つめることが出来たことです。日本にいてはなかなか出来ないであろう貴重な体験にとても満足していますし、多角的な視野をもって物事を考えることの重要性を、身をもって感じることが出来たと思っています。

また、最後のクラスでは３人ずつのグループにわかれて最終プレゼンテーションを行い、私のグループではパレスチナ問題について発表しました。本番は緊張してしまって思うようにいかなかった部分もありましたが、自分が担当したパートの内容を先生に褒めていただいた時の喜びは、本当に大きなものでした。まわりの優秀な学生たちにいつも劣等感を抱いていた私でしたが、このプレゼンを通して少し自分に自信を持てるようになった気がします。

毎日授業の予習と復習に追われ、渡航前に想像していたよりも大変なことが多かった

３週間。授業内容はたしかに難しかったけれどとても興味深いものでしたし、毎日必死にクラスについていこうとしたことで非常に多くのものを得ることができたと確信しています。

◆ **滞在先について**

留学中は、ロンドン大学の寮のひとつであるDinwiddy Houseに滞在していました。サマープログラムで出会った友人たちもほぼ全員この寮に泊まっていたので、最終プレゼンテーションの準備の際には夜に気軽に集まることができてとても助かりました。また、部屋は１人１室与えられており、キッチンだけは自分も含めフラットメイト６人と共同で使うという形式になっていました。フラットによって設備に若干違いがあったようですが、私のところは調理器具や食器などある程度のものがそろっていたので、フラットメイトの中には自炊している人もいました。私自身はあまり自炊しなかったのですが、学校帰りに出来合いのものを買って、自分の部屋ではなくキッチンでフラットメイトと一緒に食べることが多かったです。食事をとりながら友達と授業のことを話したり週末の予定を一緒に立てたりするのは、とても良い息抜きになりました。また、たまに夕食時にフラットメイトの友達が遊びに来ることもあり、その人たちとも仲良くなることができたので、Dinwiddyのキッチンには大切な思い出がたくさんあります。フラットメイトに恵まれただけでなく、セキュリティーもしっかりしていて部屋も使いやすかったので、毎日安心して過ごすことが出来ました。

◆ **現地生活・現地の人々について**

イギリスは物価が高かったので、普段の生活にはあまりお金をかけないように工夫しました。たとえばお昼ご飯はサンドイッチを作って大学に持っていくようにしていましたが、SOASにはお昼の時間帯に無料でハラルフードを配る団体が来ていたので、それを利用して食費を浮かせている学生も多かったです。また、イギリスはご飯が不味いなどとよく言われていますが、お店を選べばおいしいご飯を食べられるし、最近は日本食を扱っているお店も本当に多いので、日本食が恋しくなった時にはとても助かりました。また交通手段に関しては、ロンドンは地下鉄が非常に発達していて便利でしたが、電車賃が高めなので頻繁には利用せず、歩いていける距離のところならばなるべく徒歩で移動するようにしました。ロンドンは日本とは街並みが違っていて、建物や道沿いのお店を眺めながら歩いているだけでもとても楽しかったので、長時間歩いて

も苦になることはなかったです。そして週末や放課後には友人たちと思う存分観光を楽しみました。大学と大英博物館がとても近かったので放課後には大英博物館に行ったり、週末にはコッツウォルズ・ウィンザー・バースなど少し遠いところまで行って、ロンドンとはまた違ったイギリスの一面を見ることができました。旅先で出会う人々やたまたま同じツアーに参加した人たちとコミュニケーションをとるのも非常に楽しく、時間やお金をもったいながらずに積極的に外出・観光をして本当によかったと思っています。

SOAS 短期留学を終えて

理学部生物学科　2 年　梶浦実里

SOAS での授業

SOAS の夏季プログラムには様々なコースがあり、そのなかで私は English Language Skills を選択しました。生徒は 1 クラス 8 人に対し先生 1 人で、積極的に発言を促されるかたちの参加型授業でした。午前の授業では速読および essay の書き方を、午後の授業ではスピーキングやプレゼンテーションについて学びました。コースの最後に各授業内でテストが実施されましたが、日本で行われるような一般的なペーパーテストではなく、essay を決められた時間内に書く、与えられたテーマについてのプレゼンテーションをクラスの前で行う、という内容でした。どちらのテストについてもしっかりと授業についていけば問題なくこなせるもので、クラスの 8 人の生徒全員が無事プログラムを修了することができました。先生は生徒の出来を点数化するのではなく、必ず良い点と悪い点の両方を一人ひとりに伝えてくれるので、どこをどう改良したらよいのかがとても分かり易かったです。授業の進行についても、速すぎず遅すぎず生徒の理解度に合わせて進めてくれており、また不明点を質問しやすい空気であったため、分からないまま進んでいくということはあまりありませんでした。英語で授業を受けることに不安があっても、思った以上に理解でき先生も気にかけてくれるので、迷っているのなら思い切ってチャレンジすることをお勧めします。

ロンドンでの自由時間

授業が午前と午後にあるため、1 時間の昼食休憩があります。学食に行って食べるもよし、弁当を作って持っていくもよし、学外に食べに行くもよし、と、クラス以外の SOAS の生徒とも触れ合える機会がありました。特に学食は多くの人で賑わっているので、さまざまな人と話すことができて楽しかったです。また、週に 1 回学校主催のパーティがあり、そこでも SOAS の生徒と仲良くなる機会がありました。

休日は、カーニバルやコッツウォルズ観光、博物館巡りやロンドン市内観光をして過ごしました。宿題が出るので完全に遊びまくるというようなことはできなかったのですが、それでも十分な量の観光ができたかと思っています。一番心に残っているのは、プ

ログラムの最後に先生が生徒 4 人を観光案内してくれたことです。ロンドンアイとビッグベンに行くつもりだと話したところ、夕食もかねて案内してもらえることになり、念願だったライトアップされた夜のビッグベンを写真に収めることができました。

一人でロンドン市内を歩くこともありましたが、街はそれほど危険ではなく日本と同じ程度の最低限の防犯意識があれば問題ないかと思います。

ロンドンでの生活

私は学生寮で 3 週間生活しました。部屋は広く、タンスや収納ラックがありとても快適でした。しかし風呂の環境が日本とはかなり違い、シャワールームすらなくシャワーが高い位置で固定されているだけなので慣れるまでに時間がかかりました。また、部屋の清掃が週 1 回で行われるのですが、水回りやベッドの清掃は行われずバスタオルの交換のみで、実質部屋の掃除は個人で行うかたちになりました。部屋のライトが暗いので、夜に勉強するときにとても見にくかったです。しかし、総合的には慣れれば問題なく生活できる環境でした。5 部屋に 1 つキッチンがあり、弁当づくりや夕食づくりの際に利用しました。物価が高く、毎日のように外食を続けていると金銭的に苦しくなってくるため、自炊やスーパーで安く買ったインスタントのものを食べるときも多々ありました。

寮から学校までは徒歩 30 分ほどかかりました。遠いと感じるかもしれませんが、街並みを楽しみながら歩けばそう遠くはなく不便とは一度も感じませんでした。また、学校の隣に大英博物館があるので放課後に見学することもできました。寮や学校はロンドンの中心にあり、地下鉄やバスの本数が多く交通の便はとてもよかったです。

イギリスの方はとにかくパブが大好きで、なんと学校にもパブがありました。放課後に先生からパブにてフィードバックをもらったり、前述した学校主催のパーティではパブに行ったりもしました。イギリスでは 18 歳から飲酒できるので学校にもこういった施設があるのだろうと思いますが、飲酒に否定的な日本との違いに驚かされました。

まとめ

たとえ 3 週間と言っても、日本を離れ海外で生活することは容易ではありません。生活環境の差や言語の不自由さに最初は戸惑いましたが乗り越えることができました。勉強面では、プレゼンテーションのテクニックなど今後に活かせる内容を学べたことが何

よりの成果だと思っています。留学というとハードルが高く聞こえるかもしれませんが、3 週間という短い期間なので、留学に苦手意識がある方に是非挑戦してもらって留学の楽しさと海外ならではの授業で得るものの大きさを体感してほしいです。また、どうしても言語学を学ぶ人が留学しがちですが、生物を専攻している私にとってもかなり身のある授業内容だったので言語について学んでいない人にもお勧めしたいです。

「日本人」であること

生活科学部人間生活学科生活文化学講座２年　河村奈央子

ナショナルギャラリーの前で友人と

「私って日本人なんだな。」—これが今回の留学で感じた全てです。語学研修、生活、文化、あらゆる面からこの当たり前の事実を、衝撃的に自覚させられました。

私は３週間の English Language Skill のコースを受講しました。午前２時間の reading/writing のクラスでは、academic writing の習得をめざして学習しました。introduction/main body/conclusion を主軸に academic writing の書き方を丁寧に学んでいきます。最終的に一つの essay をテスト形式で授業内に書き上げ、クラスメイトや先生の丁寧なフィードバックを受けました。午後２時間の listening/speaking のクラスは、discussion を中心に進められました。賛成・反対意見の表現の仕方や、話者を遮って自分の意見を主張する言い方などを、具体的なフレーズを覚えて実践的に練習していきます。最終日に一人 5 分間の presentation を行い、フィードバックを受けました。

どちらの授業もその大半は、グループワークまたはペアワークで進められます。これは、互いの意見を共有し分からないことがあれば補足・補強し合っていこうとするもので、欧米では至極自然なスタイルです。しかし正直私はこれが苦手でした。それは日本の教育との大きなギャップから来るものだったと思います。とにかく小さなことでも、誰かの意見の繰り返しでもよいから、口から英語を出すということに努めました。日本人が多い私のクラスでは、先生もそれを考慮してなのか、英語のスキル以前にこうした日本人特有のシャイ気質を取り除く精神改革に時間を割いて下さっていたような印象があります。授業の内容は決して難しくはありませんでしたが、このような初歩的なことでつまずいた自分にいらだちを感じつつ、英語が第一言語でないにも関わらず使いこなす他の学生たちに劣等感を感じつつ、3 週間の学習を終えました。

研修期間中は、大学の寮で生活しました。一人部屋にお風呂とトイレは付いていますが、キッチンは 5 人のフラットメイトと共用です。ロンドンは物価が高く、ランチのサンドウィッチは自分で毎朝手作りしていました。放課後を利用してロンドン市内の観光をしたり、美術館やミュージカルなどにも言ったりすることができました。週末には、


週末に訪れたストーンヘンジ

オックスフォードやストーンヘンジ、バースなどの郊外を訪れイングランドを満喫しました。その際のバスや電車、ツアーのブッキング等を、全て自分の英語を通して行ったことは、毎度緊張させられましたが自信に繋がったと思います。こうした経験一つ一つから、自立して挑戦していく気持ちや物怖じしない精神などが培われたと思います。困ったときに SOS を出すこと、思うように行かなくてももう一度やってみること、または次の手を考えることなど、問題解決能力が育ち、ちょっとやそっとのことで慌てたり絶望視したりすることもなくなりました。また、観光客を狙った悪質な手口にも直面し、NO と言う強さや危機管理能力も身に付いたと思います。

ファッション史に興味がある私にとって、初めてのヨーロッパは大変感慨深いものがありました。ロンドンには、市内中心と西側を主に、街を歩いて感じられるほどの分厚い歴史や文化が、一方でイーストロンドンを舞台にアートやファッションなどの強く個性的な現代文化が、共存しています。どちらを見ても、これが「本物」であれば、日本はいわば「偽物」であり、急激な西洋化によって行われた「真似っこ」なのかもしれないと思わずにはいられませんでした。洋服は所詮西洋の衣服であるのだと肌で感じました。外国に対してというより、自分の国日本がそういう国だったと知った、逆カルチャーショックのような状態に陥りました。西洋服飾を学ぶ以前に、もっと和装に誇りを持って日本服飾を学ぶべきかもしれません。何よりも、こうした衝撃を英語で上手く伝えることができなかったことが最も悔しかったです。異なる国の人同士が話すのは、当然英語であり、英語の習得なしには文化交流以上のものはできないと強く感じました。アカデミックな分野で主張したいのであれば、今までのような「とりあえず通じる英語」ではなく、確実な英語スキルが必須です。今の私には、同じ土俵に立つことさえもできないのかもしれません。

このようにして、今回の留学では「私は日本人だ。」ということを痛烈に感じました。自分の進路や専攻に迷っていたこのタイミングで、ロンドン留学を経験した末のこの自覚は本当に大きなものです。３週間という留学期間は短すぎるようですが、１週間の旅行では感じられない、しかし半年や一年以上の長期留学では麻痺してしまう第一印象や「初めて」の衝撃、様々な不和、といったものに確実に気づくことができ、悩み、今後の自分に影響する純粋な「なにか」を得る最適な期間だと思いました。また次に挑戦したいというモチベーションを与えてくれました。

SOAS での学習

文教育学部　言語文化学科　１年　後藤明希

授業内容

English Language Skills という授業を選択し、英語でのディベートやプレゼン、エッセイの書き方などを学びました。「Skill」の名の通り、自分の意見を効果的に伝えるためのテクニックを学んだことは、英語だけでなく普段の日本語での活動の時にも役立つと思います。ディベートでは、「意見はあるのに英語で表現できない」「そもそも自分の意見をはっきりさせられず、参加できない」という両方の経験をしたので、「英語は単なるツールである」と言っておろそかにすることも、英語ばかりを勉強して他の勉強をしないのも良くないのだと感じました。

滞在先について

大学から歩いて２５分ほどのところにある、Dinwiddy House という大学寮に滞在しました。早朝から深夜まで管理人の方や警備員の方がいらっしゃるので、何か困ったことがあってもすぐに対応していただけて安心です。寮は個室で、６つほどの部屋が集まって Flat というものになっており、各 Flat に１つずつキッチンがありました。キッチンにはオーブンや冷蔵庫がいくつも置いてあったので、料理するのに不便はありません。また、すぐ近くに TESCO という格安スーパーの大きな店舗もありました。最寄駅がすごく大きな駅（ユーロスターの発着駅にもなっているくらいの国際駅）なので、お出かけにも便利です。イギリスは物価が高いこともあって寮の洗濯の料金も高かったので、洗濯機を使うときはほかの人と一緒に洗濯をして一人当たりの料金を節約していました。

現地生活・現地の人々について

イギリスの人たちは親切でおしゃべり好きな印象が強いです。高齢の方に席を譲る人をすごく多く見かけましたし、少し方がぶつかるとすぐに「Sorry!」と言って会釈してくれました。そういうときに話したことがない人同士でもにっこりと笑っておしゃべりが始まり、すごく良い雰囲気でした。最初は、お店で買い物をするたびに「Hello. How are

you?」などと言われると日本との違いに戸惑ってうまく話せませんでしたが、慣れると次第に会話を楽しめるようになりました。また、イギリスは少し足をのばせば歴史的な建物・文化に簡単に触れることができます。世界的な画家・彫刻家の作品を収めた美術館や博物館がたくさんあり、数え切れないほどの名作に触れられました。

SOAS University of London サマープログラム

生活科学部　２年　新島 凛

「価値観が変わる」「世界が広がる」留学を経験した人が口を揃えて言うこれらの言葉がどのような意味を含んでいるのか、それを追体験するというのが今回の留学の目的の一つでした。結論から言えば、私は３週間という短い期間で、学習面、生活面、精神面において多くの刺激を受け、自身の自立を促すようなモチベーションを貰うことができたと感じています。

学習面。ここは真面目に。SOAS のプログラムでは、各自の能力、興味に応じて語学または文系専門科目を選択出来ます。私の受講した English Language Skills では、いわゆる４技能を満遍なく伸ばす授業が行われました。リーディング・ライティングでは文章の構成や談話指標に注目し、効率的に文章を理解すること、また主張を明らかにして論点を伝わりやすく書く方法を学習しました。高校までや大学などでの英語学習からさらに一歩踏み込んだ、より論理性を意識した授業である印象でした。スピーキング・リスニングでは、与えられたテーマについて１対１、グループなど様々な形態で、とにかくたくさん話す練習をしました。印象強かったのは interrupt の授業で、これは相手の話を失礼なく遮って主張を伝えることなのですが、「人の話は最後まで聞きなさい」と教え込まれてきた私にとっては最難関の授業でした…。また講義を聞いてその内容について議論する授業も行い、今まで意識してこなかった効率の良いノートの取り方を教えて頂きました。基本的なことなのですが発見も多くて、帰国後もしっかりトレーニングしなくてはいけないと感じています。最後の授業ではクラスの前で自分の興味あるテーマについてプレゼンを行いました。私のテーマはソーシャルメディアが社会に与えた影響についてだったのですが、発表後の質疑応答が盛り上がり、質問に応えていく中で、自分の英語力が着実に上がってきていることを実感出来ました。(嬉しかった！)

続いて生活面。少しリラックスして。ロンドンでは学生寮に滞在し、基本的にずっと自炊をしていました。実家暮らしの私にとって完全な自炊は初めてでしたが、物価の高い(感覚として東京の 1.5～２倍くらい)のロンドンでいかに節約するかを考えるのはなかなか楽しい体験でした。同じフラットの人と食材や調味料を分け合ったり、美味しくて値段の手頃な店の情報を共有したり。節約する中でも自分の栄養バランスと食満足は考え続け

て、予算通り生活出来たらおやつを買って自分にご褒美していました。苦労した点として、硬水が体に合わなかったこと、卵に食あたりして胃痛に悶えたこと（ありがとう正露丸）、最終週に風邪をこじらせ頭痛に耐えながらプレゼンしたこと、ですかね…体調管理は大事です。

放課後や週末には積極的にロンドン市内を散策していました。大学に隣接する大英博物館はもちろん、ナショナルギャラリー、自然史博物館、ノッティングヒルカーニバル、シティ街、グリニッジなどなど。博物館・美術館の多くは入場無料のため、行く先々で回りました。同じクラスのお茶大生と行ったアビーロードやハリー・ポッタースタジオツアーもにぎやかでとても楽しめたのですが、一匹狼な性格もあり、１人でロンドンを散策する時間が発見に富んでいて印象的でした。もちろん危険が伴うので安全には気を配る必要がありましたし、１人で行動を決めて現地の人とやりとりをする過程を振り返ると、自立心を養えたように思います。ロンドンは歴史的な建築がとにかく美しくて、街を歩くだけでも幸福感一入でした。

精神面。語らせて下さい。授業でも幾度となくロンドンと各自の出身地の違いについて考える機会が与えられましたが、やはりこの点が３週間の中でも特に考えさせられた問でした。どちらがいいかという結論ではなく、それらをどう捉えるかという問題として、私なりの考えを書いていきたいと思います。

ロンドンで印象的だったのは、人々が精神的に自立している点。些細なことばかりですが、それを感じる機会は多かったです。考え方がとても合理的で、正しいと思ったら自己主張を抑えることはしない。その一方で、相手への敬意は欠かさないよう努める、そういった印象でした。ただし決して日本が劣って感じたのではなく、日本のよさを痛感する点でもありました。自分の意見をはっきり主張するのが苦手であるとよく揶揄される日本人ですが、規律や場の空気に合わせた対応が出来ること、おもてなしの心が非常に行き届いていることは、誇るべき美点であると改めて感じました。

また、勉強熱心な人間が多い点。文系専門科目の授業を聴講する機会を頂いたのですが、同年代の学生が堂々と自分の意見を発信し、質疑を投げられても冷静に対応した上で論理的に反駁している様子を見て、大いに刺激を受けました。他学生と話をしていても、「あなたはどう思うのか」を常に問われ、また同じ賛成/反対でもどのような根拠でその結論に至ったのかという過程を重視する等、論理的な思考の持ち主が多いと感じました。日本人が周りのために努力することが出来る人間だとすれば、ロンドンの人間は自分を高めるために努力を惜しむことはしないという印象でした。

３週間の研修を経て、様々な刺激と多様な考え方を吸収することが出来ました。今後の大学での勉強でも、語学力の向上はもちろん、自分を成長させていくことへの高いモチベ

ーションを保ちながら臨みたいと強く思っています。支援して下さった関係者の方や家族、多くの友人に心から感謝を申し上げます。

SOAS ロンドン大学での短期留学を終えて

文教育学部言語文化学科仏語圏言語文化コース　3 年　高橋佑里

-研修内容

私が参加した English Language Skills では、午前と午後で二人の講師による授業に参加する。英語で話す・聞く・書く・読む、のすべてを習い、最終日には学習の成果を披露する。またほぼ毎日宿題が出されるため、予習復習は欠かせない。また授業前後の雑談も英語で行なうため、和やかなスキンシップもはかることができた。

-SOAS での生活

私が留学した大学はロンドン大の一部であり、特にアジア・アフリカ研究のさかんな研究機関である。留学生も数多く受け入れており、そのためすれ違う学生もアジア系の学生が非常に多かった。そのため聞こえてくる言語も英語だけでなく、様々な言語が入り交じっていた。もちろん食堂のメニューも学生の宗教や嗜好に合うように考えられており、学生の多様性を表している。

-ロンドン滞在

キングスクロス駅にほど近い大学寮は、バスルーム付きの一人部屋で数人の学生とキッチンをシェアするフラット制である。雨が多く年間を通して寒いロンドンらしく、部屋に冷房のための装置はなく、暖房のみである。しかし予想以上に寒い日が続いたため、新人デザイナーが売り出すマーケットを回り、上質な素材の服を格安で買うなど、自分なりの対策が必要である。

-プログラムを終えて

１年以上英語を勉強していなかった私にとって、イギリスに単身飛び込むのは緊張の連続であった。何をするにも不安がつきまとい、ロンドンに着いてしばらくは観光する気分にもなれずにいた。しかし授業や寮のフラット、学食で出会った友人と話しているうちに自分がここに来た意味を考え、積極的な発言をし、留学前より英語力ははるかに上達したと確信している。

SOAS への短期留学を終えて

理学部　生物学科　２年　川口舞

研修内容について

わたしは、SOAS（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院）の English Language Skills 3 というプログラムに参加しました。このプログラムは、Reading & Writing の授業と Speaking & Listening の授業とでわかれていました。Reading & Writing の授業では、教科書にある文章を速読・精読の二つの方法で読んだり、アカデミックなエッセイを書く練習をたくさん行ったりしました。宿題は、授業内でトピックや語数、使うフレーズを指定され、それに従って文章（エッセイ）を書いてくる、というものが最も印象的でした。そして、その宿題を次の日にクラスメイトと交換してお互いに校正しあうのもまた印象的でした。まとめとしての授業では、授業やその宿題でやったことなどを応用し、トピックや語数を指定され時間内にそのトピックに賛成か反対かのエッセイを書きました。Speaking & Listening の授業では、あるトピックについてその日テーマに注意しながらクラスメイトとディスカッションしました。そのトピックは専門的なものもあり、難しかったのですが、専門的な単語を知らなくてもクラスメイトになんとか例などを挙げて自分の伝えたいことを伝える経験をはじめてしました。わたしは特に英語が苦手で、自分の伝えたいことを他人に伝えることがとても大変だったのですが、クラスメイトのみなさんが一生懸命わたしの伝えたいことを理解してくれようとしたので、がんばることができました。まとめとしての授業では、『世界の歴史を変えた何か』についてプレゼンテーションを行いました。わたしはクラスメイトの中でも唯一高校で世界史を選択しなかったので、このトピックだと知ったときは焦りましたが、世界史をやってないなりに違う視点でプレゼンテーションをしました。英語でプレゼンテーションをするのもはじめての機会でした。

滞在先について

SOAS の寮のひとつである Dinwiddy House に滞在しました。わたしは D1A1（D 棟の１回の A フラットの１号室）という部屋でした。一般的にイギリスでは、日本でいう１階は０または G と表現されるので、日本でいう２階がイギリスでは１と表示されます。キッチンはフラットごとに一つあり、そこで調理します。しかし、自分の必要な物がそのフラットにそろっているとは限らないので、そろっていない場合は他のフラットから借りたり自分でそろえたりします。フラットによって備わっているものの種類や数が違うところが日本とイギリスでは異なると感じました。また、バスタブはなく、移動不可のシャワーのみでした。ベッドはわたし的には寝心地がよかったです。D 棟は工事中だったのですが、工事の人たちが気さくに挨拶をしてくださったので、気分がよかったです。わからないことがあったら受付のスタッフの人に聞けば答えてくれたので、その点も安心しました。

現地生活&現地の人々について

わたしは８月の下旬から９月の半ばくらいまでロンドンに滞在したのですが、まず天候に関して、雨が突然降ることが非常に多く、この時期の日本とは違い、あまり湿気はなく暑いときもあれば冬のようにとても寒いときもありました。また、わたしが行ったとき株価は１£≒200 円だったので、日本に比べて物価が２倍に感じました。特に食料・飲料の値段がとても高く感じたので、TESCO というスーパーを重宝しました。ただし、醤油やお米などはありませんでした。わたしは、イギリスに行く前にさまざまな人から「イギリスは食べ物まずいよ」と言われていたのでとても不安だったのですが、わたし的にはまずいと感じた料理はありませんでした。しかし、イギリスで何かを食べても心は全く満足しなかったので、日本の食事が非常に恋しくなるときが何度もありました。３～４週間の滞在にもかかわらず、何度か日本の食事が食べたくて我慢できなくなったときがあったので、日本人が経営する日本食やラーメンのレストランに行きました。イギリスでの日本食レストランはとても値段が高く、一食 5000 円くらいしてしまうのですが、イギリスで食べる日本食は涙が出るほどおいしくて、その値段を出す価値があると感じました。何度か日本の食事が食べたくて日本に帰りたくなるときはありましたが、イギリスでの人とのふれあい・経験は日本ではできないことであり、とてもよい経験になりました。

SOAS Summer Program を終えて

文教育学部言語文化学科１年　脛永舞花

● 研修内容について

私はEnglish Language Skillsの授業に参加しました。Reading and Writing の先生、Speaking and Listeningの先生がいらっしゃって、午前午後と分けて毎日 10 時から３時までの授業でした。Reading and Writing の授業ではSkimmingやScanningといった英語の長文解釈方法の練習や宿題のエッセイを生徒同士で添削し合うなどしました。最後には 500words でconsumerismに関してのエッセイのテストもあり、その準備のためにテーマに沿ったディスカッションも行いました。Speaking and Listeningのクラスでもディスカッションは頻繁に行いました。中国人とドイツ人の学生が同じクラスにいて、違う立場からの意見を聞くことができたのは貴重な体験となりました。

通学路

● 滞在先について

SOAS への留学生が多く滞在している学生寮に入りました。フラットに分かれていて、キッチンは各フラットにひとつあり、食材をスーパーで買ってきて自炊することもできました。フラットで違う授業を取っている学生との新しい交友関係ができたので良かったです。寮で飼っている猫が３匹いて、とても可愛らしかったです。

ロンドンバス

● 現地生活について

平日は寮から学校まで３０～４０分ほど歩いて通学しました。古い建物が多く残っていてロンドンの歴史を感じることができました。授業が終わってからは博物館や美術館へ行ったり、買い物や外食もしました。ロンドンでは多くの博物館・美術館には無料で入館でき、

ゆっくり鑑賞することができました。移動にはチューブと呼ばれる地下鉄や赤い二階建てのロンドンバスを使いました。日本に比べると交通費は高かったです。私は、ロンドンの街並みを楽しむことができるロンドンバスを良く利用しました。チューブの駅にはパフォーマンスゾーンがあり、ギターやバイオリン、キーボードなどでの演奏を楽しむことができました。

McGill

Canada

参加者 2 名

McGill 大学での短期研修に参加して

生活科学部人間生活学科
発達臨床心理学講座２年　中山莉子

約３週間の日程でカナダ・モントリオールにあるマギル大学でカナダ文化と英語を学んできました。私にとって今回の研修が初めての海外であり、また渡航準備はほとんど自分自身でしなければならず、直接相手の大学側に連絡を取ったり、滞在先を確保したり緊張や不安も大きいものでした。しかし、この研修を通して出会った人々は私に大きな刺激と変化を与え、また自分自身で研修の手配し、無事にプログラムを終えることが出来たことは今後の自信にもなりました。

今回の McGill 大学での研修は日本人学生のために毎年行われている語学研修プログラムでした。関東の大学を中心に約 80 名の日本人がこの研修に参加していましたが、私たちの大学にとってこのプログラムへの参加は初めてで、私を含めお茶大生は２人だけでした。実は渡航前は日本人だけのプログラムであると知らなかったため、初日は驚きと不安がありましたが、日本人が多かったからこそ普段の日本人同士の会話でも積極的に英語で話すことを心がけることができ、英語を使う機会を多く持つことが出来ました。授業は平日午前８時半から 12 時までの座学中心の授業と、午後は 4 時半までの課外活動で構成されていました。また週に 1 回の計 3 回、発音に特化した授業がありました。また、授業の内容はそれぞれのクラスによって異なり、議論やプレゼンが中心だったクラスや、私のクラスのようにより実践的な Speaking のスキル向上に重点を当て、リスニングと会話中心のクラスもありました。午後は授業で扱った内容に関するモントリオールの名所や施設にクラスモニターと呼ばれる現地の学生スタッフ一人と日本人学生５、６人という小グループで outing に行きました。授業とは違い、午後の活動はモニターの学生と英語でさまざまな内容の会話を楽しむことができ、とても充実していました。そして夕食後には、寮の中でのグループの活動があり、英語の人狼をしたり、モントリオールの街に遊びに行ったりしました。また週末には首都オタワへの小旅行やオプションとしてトロント旅行やホームステイがありました。ま

た、授業の最終日にはモントリオールの街全体を使って英語でのオリエンテーリングのようなものがありました。全体を通して、全身を使ってカナダを、そしてモントリオールに親しむ・とけ込むことが出来たプログラムでした。

滞在先はホームステイの２日間を除き、大学寮でした。大学寮は一人一部屋だったため、課題がある時やリラクッスしたい時は部屋で過ごし、英語を話したい時は寮に一緒に滞在しているモニターたちとゲームをしたりしました。大学寮ではほとんど毎日三食が食堂で用意され、時にカナダ伝統の料理を寮の中庭でピクニックのようにして食べることもありました。また大学寮はモントリオールのダウンタウンの近くにあり、時に自由時間に買い物に行ったり、建物を見て回ったりすることもありました。

モントリオールは、フランスパリに次いで二番目にフランス語を話す人口が多く、お店に入ると、“Bonjure, hi!” と話しかけられることがほとんどで、街の標識はどこもかしこもフランス語で書かれてました。しかし、多くの現地人はフランス語と英語のバイリンガルで、相手によって言葉を瞬時に使い分けていてとてもかっこいいと思いました。また、第二言語として中国語が多く学ばれていて、街を歩くたびに「你好。」と話しかけられました。ホームステイ先では、老夫婦のご家庭でお世話になりました。期間は２日間という短いものでしたが、日中は動物園に行ったり、川で水上バイクのようなものに乗ったり、市場に行ったりして、夜はホストファミリーと一緒に映画やドラマを見ました。モントリオールの夏は短く、冬はとても長い為に、現地の人は夏に積極的に外に出て過ごし、とても楽しんでいる印象をうけました。そして、この滞在を通して、モントリオールの人はおおらかな人でオープンな人が多いなと感じました。朝ご飯と昼ご飯を一緒にするブランチがモントリオールの習慣としてあったり、お店の開店時間が短かったり、仕事と余暇の過ごし方が上手いからこそだと思いました。

この研修全体を通して、英語でコミュニケーションをとるスキルだけでなく、自分をしっかりと出していくこと、自信を持って話をすることの重要性を学びました。今後、この経験を自分の将来に活かしていけるような行動をしていこうと思います。

マギル大学での研修を終えて

文教育学部人文科学科１年　水澤有奈

１．はじめに

私は、7 月 30 日から 8 月 26 日までのおよそ１カ月、カナダのマギル大学へ短期留学に行きました。もともと、自然豊かなカナダに憧れを抱いており、また留学先となるマギル大学は、カナダ屈指の名門大学であることも後押しし、カナダのマギル大学に決めました。

マギル大学への留学が今年度からということもあり、渡航前の準備が、とても大変でした。というのも、行き帰りの航空券や海外保険を全て、自分で用意しなければならず、また渡航日も各自で決めて行くといったものでした。渡航前に、マギル大学の責任者と何通ものメールをやり取りし、無事に参加することが出来ました。

また、お茶大からの参加者が少ないということも、大きな特徴だと思います。今回の参加者は私を含めて２人でした。初めは、不安だったものの、現地では、日本人で固まらず、積極的に行動することができ、友達の輪も大きく広がりました。もちろん、途中、心が折れそうになった時は、一緒に行った先輩にとても助けられました。

２．プログラム内容

クラス：事前テストによる細かいスコア分けがされ、20 人弱の少人数制グループであるため、先生との距離も近く、非常に充実したものとなりました。グループワークの機会も与えられ、また、同年代ばかりなので、発言もしやすかったです。授業での議題は、主にカナダの文化についてであるため、決して観光だけでは学ぶことのできない（カナダの税金やコミュナトというカーシェアリングカンパニーなど）カナダの生活について学ぶことができました。また、そこで学んだことを午後のアクティビティで、実際に訪れたりするために、より理解が深まります。

午後のアクティビティ：アクティビティといっても、モントリオールの観光巡りです。クラスを６人グループ×３に分け、1 グループ（６人）に 1 人の現地学生がついてくれるので、英語で話す機会がとても豊富になりました。初日から、私たちの名前や趣味、専攻を覚えてくれたりと、一気に距離が縮まりました。学生ならではの、リアクションや人気のお菓子といった、本場の文化に触れられた気がします。

レジデンスでの生活：およそ 10 人強のグループに分けられ、1 グループに 1 人のモニターが付いてくれます。朝食と夕食を共にするため、家族のような仲になります。モニターはとても面倒見がよく、聞き取りやすい英語で話してくれたりと、本当に優しかったです。

最後のフェアレルパーティーでは、グループごとに出し物をするため、その練習をするごとに、さらに、仲が深まっていきました。

３．学習成果

英語力に関して、もちろんどちらかと言えば上がりましたが、そんなことよりも、自分の英語力の低さに対する危機意識が生まれたことがとても大きい成果だと感じます。他大の日本人学生との出会いを通じて、学歴に関係なく英語を話せる人は話せると感じ、焦りを覚えました。このまま学歴に甘えるのではなく、学生生活をどう過ごすかが本当に大事になってくると感じました。

初めは、少しでも多く、英語を話す機会を持とうとガツガツとモニターに話しかけていましたが、徐々に、英語力向上の為ではなく、単に、人と人として話したいという感情になっていきました。モニターと仲良くなるにつれて、自分の言いたいことの言えないもどかしさ、話が続かない悲しさが、より募っていきました。

ホームステイでは、ホストファミリーが本当に良くしてくれて、英語学習に関するたくさんのアドバイスをいただきました。full（お腹いっぱい）やMexico（メキシコ）が通じなかったりと多くのショックを受け、コミュニケーションへの積極性がもちろんのこと、発音の向上の必要性を実感しました。

４．現地の文化

モントリオールは、非常に素敵なところでした。クリーンで、自然豊かなうえ、経済も発展しており治安も良く、気候的にも過ごしやすい（ただ夏限定のよう）。フランス語圏のケベック州に属していることもあり、少し行けばヨーロッパの街並みになります。

また、非常にエコな国でした。自転車専用道路や、自動ドアが極端に少ないなど、もっと細かい点も含めて、日本が見習うべきいくつかを発見しました。

そして何より様々な人種が共存していて、２か国語以上話せるのが普通であることにとても驚いきました。将来の話をすると、必ずどこの国で働きたいかという話になり、良い刺激を受けました。ベジタリアンの多さやホームレスの多さ、素直に人を褒める点など、きりがないほど、日本との違いを実感し、日本を客観視する良い機会となりました。

５．おわりに

今回の短期留学は、本当に、私を大きく変えてくれました。

全く異なるバックグラウンドを持つ人と話すことは、自分の今まで見えてなかった部分にも目を向けさせてくれ、とても面白かったです。例えば、日本のサラリーマンの平均年収

やクレジットカードの利子率など、常識を含め、日本のことをもっと学ぶ必要があると気が付きました。

　また、他大の日本人学生による刺激を得られたことも大きかったです。将来の具体的な職業は、未定ですが、学生中に幅広く教養と語学力を身につける決意をしました。今回、この留学を支援してくださった皆様に、心より感謝を申し上げます。

CLERMONT-FERRAND II

Université Blaise Pascal

France

参加者１名

ブレーズ・パスカル大学のサマースクールを終えて

人間文化創成科学研究科　比較社会文化学コース　歴史文化学コース１年
越智由紀子

授業内容

フランス語の文法事項を確認しながら、クレルモン=フェラン及びオーヴェルニュ地方の文化や特産物などについて学んだ。

課外活動

授業日数 10 日の間で、課外活動は 2 回である。前日の授業で、行先に関する知識を学ぶが、行程についての情報は、当日行ってみないとわからない。ほとんどの場合、集合時間しかわからないので、詳しいことは、問い合わせるしかない。昼食は持参するように、などの情報は事前に知らされないこともあるので要注意である。1 回目は、貸切バスで、1 日をかけて、サン・ネクテール（チーズ）の工場を見学したり、ムーラール城という中世の城を見学したりした。2 回目も、貸切バスで、半日を使用して、採石場跡を見学した。オーヴェルニュ地方は、火山地帯として有名で、良質な火山性の石が採石される他、ボルヴィックに代表されるように美味しい地下水も産出される。

クレルモン=フェランでの生活

お茶の水女子大学が提携校を有する、ストラスブール、クレルモン=フェランの 2 都市で語学を学び、またパリ及びリヨンでも 1 週間程度の滞在をした経験がある。クレルモン=フェランはこの 4 都市の中では、比較的規模の小さな都市と言える。観光名所や美術館、博物館という点では、他の都市と比べて物足りない。しかし、オーヴェルニュ地方は、自然がとても豊かで、課外活動で赴いたチーズ工場や採石場跡の他、多くの休火山は観光名所となっている。タイヤ会社で、ミシュランガイドなどを出版しているミシュランの本社があるのも、クレルモン=フェランである。また、今回は時期が外れているが、2 月には国際的な短編映画の祭典もあり、その時ばかりは国際色の豊かな都市になるということだ。普段はとても静かな都市だが、活気がないというわけではなく、交通手段もトラムとバスが整備されており、特に問題はない。静かな場所でじっくりとフランス語の勉強に勤しみたい人には、打ってつけではないかと思われる。

クレルモン=フェランは、夏はとても暑く、冬はとても寒い気候である。日が長く、夜の 9:30 ごろまで西日が眩しいのは辛かったし、空調がないのは堪えた。しかし、乾燥しているので、洗濯物はよく乾いた。とにかく日差しがピカーっと降り注ぐので、眩しいが、薔薇が綺麗に咲いた公園での昼食は気持ちが良かったし、規模の大きい公園や広場には、フリーワイファイが整備されているのも、とてもありがたかった。

伝統料理には、チーズがふんだんに使用されたしっかりとした味付けがほどこされていた。多少日本人には濃い味付けではあるが、美味しいと思われる。スーパーは、モノプリ、カレフォーシティなどのフランス大手の会社が揃い、カジノというスーパーもそれなりの規模であった。食料品が最も充実しているのは、ジョード広場の近くにあるカレフォーシティである。このジョード広場は、クレルモン=フェランの都市の中心地で、百貨店や映画館、オペラ座などが隣立している。

人々はさっぱりとしていて、アジア人は少ないので目立つのかジロジロ見られることはあるが、嫌な思いというのは特にしないと思う。映画の祭典が毎年あるためか、英語を話せる人もそれなりにいるという印象で、更に英語を使うことへの抵抗もほとんどないように見受けられた。もちろん、一方で相手も、ここまで来るならフランス語が話せるのだろうという態度でもいるので、何の気なしにフランス語で気さくに話をしてくれる。そして、今回、コース参加者のうち日本人どころか、アジア人が私のみだったので、フランス語と英語はすごく必要になった。特に、授業中はフランス語のみで大丈夫だが、他の国の学生との意思疎通は、英語で行うのがほとんどで、英語も多少は話せるようになっておくべきだと感じた。

他には、南仏地方へのアクセスが多少良いということが挙げられるかもしれない。利便性で言うと、パリには劣るが、ボルドーやトゥールーズ、リヨンなどに 1 本で行けるというのは、魅力的であると思う。しかし、日帰りできるわけではないのがたまに傷である。オーヴェルニュ地方の他の都市に行くにも、すごく便利というわけではない。また、クレルモン=フェランに限ったことではないが、TER はしばしば遅延するので注意が必要である。今回は 1 時間の遅延が 2 回あった。移動日には余裕を持っておく必要があるだろう。

そして、全体的な印象として、生活費が非常に高くついたと感じている。円安の影響は大きいが、フランスの物価は決して安いわけではない。一方で、クレルモン=フェランだけではないが美術館・博物館の多くが学生は無料、または 26 歳以下は無料、という措置がされ

ており、感心した。また、日本の漫画（フランス語版）が置いてある本屋も確認しただけで3 軒あり、休日のジョード広場には日本人がちらほら、日本食レストランも散在していた。観光は2・3日で完全に満足する規模だが、勉強するのには適しているというのが最終的な印象といえる。

UNIVERSITÉ DE STRASBOURG

France

参加者 9 名(報告書 7 名)

ストラスブール大学短期留学を終えて

文教育学部言語文化学科仏語圏言語文化コース　3 年　高橋　佑里

–語学研修について

本プログラムはストラスブール大学付属の語学学校が主催するものであり、大学本部施設は夏期休業中だった。しかし世界各地から夏休みを利用して学生や社会人が数多く参加しており、非常に多国籍なクラスだったといえる。午前中はフランス語を勉強し、午後は川下りクルーズや伝統料理食事会などストラスブールを知るためのアクティビティに参加する。授業はすべてフランス語で行なわれるため文法用語など知らない語も多く焦ってしまうことも多かったが、世界中のフランス語話者と話すことで見えてくる自分の弱点や癖も把握でき、今後の学習にも有意義だった。

–ストラスブールという街

写真は、大学での歓迎パーティーを終えて帰る途中広場で撮影したものである。ストラスブールではアジア人は少ないらしく、特に浴衣姿は国の伝統衣装がないフランス人にとって非常に珍しいため何度も写真撮影を頼まれた。ストラスブールは町並みも美しく治安もいい街なので、特に危険なこともなく過ごすことができた。また宿泊先で仲良くなったフランス人がラジオ局に務めており、日本人へのインタビューということで少しだけ出演させてもらうこともできた。

–フランス生活

日本の夏より湿気が少なく、昼間もじりじりと太陽が照りつけてくる日は少ないため、非常に過ごしやすい日々であった。またフランスでは利用者と提供者という関係は平等であり、休日は閉まってしまう店も多いため、先のことまで考えながら買い物するという意識を身につけることができた。フランスに行くのは４回目となった私だが、やはりヨーロッパでは「アジア人はフランスでも英語を話す」というステレオタイプが浸透しているよ

うに感じられた。というのも、フランス語で話しかけても英語で返答されるという事態に多く直面したからだ。もちろん私のフランス語力にも未熟な点はたくさんあるだろう。だが、かつて「英語で話しかけてもフランス語でしか返してくれない」と揶揄されるほどフランス語で話すことに誇りをもっているフランス人、なんとなくギャップを感じてしまう。ストラスブールというフランスとドイツの交わる国境近くにある風土ゆえの現象だろうか。今回の留学を終え、私は改めてストラスブールに滞在してその秘密を探りたいと考える。

ストラスブール大学サマープログラムを終えて

文教育学部言語文化学科　仏語圏言語文化コース２年　佐伯風音

私が今回、ストラスブール大学サマープログラムに参加しようと思った理由は、やはり語学力の向上です。私がフランス語を学び始めたのは大学に入ってからです。学び始めてから１年と少しという短い期間ながら、私はやはりフランス語を聞き取ること、話すことが苦手だということを感じてきていました。英語と比べ、日本ではフランス語に触れる機会は少なく、フランス語を話す機会はほとんどありません。リスニング、会話の上達のためにはやはり実際にフランス語が使われる場所に行き、その状況に身を置いて学習することが１番だと思い、参加することに決めました。また、仏文コースに所属する私は、フランス文化にとても興味があり、好きです。この留学で実際にフランスに行って文化を自分の目で見て、感じることができるということも参加する理由でした。

次に研修内容についてです。最初の授業でテストが行われ、３つのクラスに分かれました。私のクラスはこの夏の２、３週間の間だけの留学の人もいましたが、９月から半年、または１年間の留学のまえに準備としてこのサマープログラムを受ける人が多く、みんなフランス語がぺらぺらでしゃべった機会のない私にとっては衝撃で不安に駆られました。もちろん授業もすべてフランス語で行われるし、最初は半分も先生の言ってことが理解できていませんでした。しかし、同じクラスだった先輩に助けてもらったり、クラスのみんなが、全然フランス語がしゃべれないし、ゆっくり言ってもらわないと聞き取れない私にも優しく私の話を理解してくれようとしてくれたりしたおかげで、とても大変だったけれど、楽しく受けることができました。また私のクラスの先生は、大学のときに日本のことを学んでいたようで、少し日本語を話せました。私があまりにもわからないような顔をしていると日本語で説明してくれたり、休み時間に話しかけると日本語で話そうとしてくれたりしました。午後はアクティビティーがあって、カクテルパーティーやクルージング、美術館巡りをしてストラスブールの街並み、文化に触れたり国際機関を見学する機会があったりして語学の勉強以外でも本当に良い経験をすることができました。

私が留学していた３週間住んでいたのは、大学の紹介する施設でした。そこには学生だけでなく、仕事をしている人もいて、いろんな人が住んでいました。大きな共同キッチンがあるので、夜みんなでご飯を食べたり、ロビーで夜中まで話したり、毎日本当に楽しかったです。もちろんロビーやキッチンには他に住んでいる外国人も来るので一緒に話したり、仲良くなった人が日本人にキッシュなどの料理を振る舞ってくれたりすることがありました。

私は初留学、初海外で日本の生活との違いにとまどうこともしばしばありました。フランスでは基本日曜日はほとんどのお店がお休みです。そのために土曜日に日曜の分まで買っておかないといけないのですが、８月１５日は国民の祝日ということで土曜日なのにスーパーなどのお店がほとんど閉まっていました。私は国民の祝日にそんなにお店が閉まってしまうことを知らず、食料や水が足りなくて本当に大変でした。しかし、戸惑うこともありながらも楽しさの方が大きかったです。週末にはコルマールというドイツの国境近くの街に出かけたり、浴衣を着てストラスブールの街を散歩したりしました。カクテルパーティーのときも何人かで浴衣を着て行ったのですが、外国の人たちにとって浴衣はとても珍しいものであり、キラキラした顔で写真を撮ったり、浴衣について聞いてくれたりして日本に興味を持ってくれることが嬉しかったです。

今回の短期留学は刺激が多く、充実したものでした。３週間という短い期間でしたが、留学の目的であった聞き取る力は向上したと思います。この３週間で学んだことは話すうえで大事なことは文法ではなくとりあえず伝えようとすることです。私のクラスの人は、フランス語がペラペラでしたが授業で文法のことになるとわかっていないところもあったり、難しい前置詞に関しては全員大混乱している様子があったりしました。私は逆で、文法の理解の割に話そうとすると全く言葉が出てこないという状況でした。文法が多少あっていなくても伝わるのだということを実感しました。この３週間で、もっとフランス語をがんばろうという気持ちがとても強くなりました。聞き取れなかったり言葉が出てこなくて悔しい気持ちになったりしたことが何度もありました。この気持ちを忘れずにこれからの学習に取り組みたいと思います。

ストラスブール大学短期留学を終えて

理学部　物理学科　1 年　三浦 桃子

＊プログラムについて＊

初日に試験を受け、レベルに応じて 3 つのクラスに分かれました。月曜日は、13 時半から 17 時半まで、火曜日から金曜日までは、9 時から 13 時までフランス語の授業を受けました。アルファベットの読み方、定冠詞や不定冠詞、動詞の活用など文法の初歩を学ぶのと同時に、会話での表現を習うことが出来、とても勉強になりました。二人組で自分たちの国のモニュメントについてのプレゼンテーションを行ったり、自分の国とフランスのお店の違いを発表したりもしました。先生は全てをフランス語で話すので、最初は何を言っているかさえ分からず大変でした。しかし、だんだん先生の指示が分かるようになってきたことが自分でも実感出来ました。火曜日と木曜日の午後は、14 時半から 16 時半まで自由参加の授業がありました。その授業では、フランスの教育制度、アルザス地方の歴史、プチットフランス、アルザス地方のシンボルやスーパーマーケットについて学びました。このようなことを習う機会はなかなかないので、知ることが出来て良かったと思いました。また、自由に参加ができるアクティビティーもたくさんありました。私は、カクテルパーティー、クルーズ、ノートルダム大聖堂の美術館鑑賞、山登り、バーベキューなど様々なものに参加しました。フランスの文化に触れると同時に、同じプログラムに参加した人と仲良くなるチャンスにもなり本当に良い経験となりました。

＊宿泊施設について＊

大学にも比較的近く、また、スーパーマーケットやパン屋さんなども近かったのでとても過ごしやすい所でした。部屋も広くきれいだったので快適でした。日本とは違いお風呂につかることが出来ないことが唯一辛かったです。

＊現地の様子について＊

フランスは日本よりも湿度が低く過ごすには快適でした。しかし、日差しは日本よりも強いのか、日本にいるときよりも焼けました。朝はかなり冷え込むことがあり比較的涼しかったので、暖かめの服装も必要でした。フランスは物価が高めで、カフェに入ると結構お金を使いました。日曜日にお店がほとんど閉まってしまうことは少し不便でしたが、平日に休日分の食料を買っておけば大丈夫でした。現地の人たちは、私たちが日本人だと分かると日本語であいさつをしてくださり、本当に優しい人ばかりでした。スーパーマーケットなどで困っていると助けてくれたり、カフェで笑わせてくれたり、すごく嬉しかったです。ストラスブールは観光地なので、人が多く、また、お土産屋さんもたくさんありました。街並みは、本当に絵本の中にいるような感じでとてもおしゃれでした。オーナメントで有名なだけあって、クリスマスの飾りや陶器が多く売っていて、とても可愛かったです。お店の雰囲気も素敵でした。フランス料理はとてもおいしくて、食べ過ぎるくらい食べていました。

＊反省と感想＊

飛行機や電車のチケットを全て先輩に手配していただいたり、パリ内の案内をしていただいたり、本当に先輩に頼り切ってしまいました。次に海外へ行ったり、飛行機に乗ったりするときは、全て自分でやりたいと思います。海外へ行くのは初めてだったということもあり、初めは不安でいっぱいでした。もともと、海外は恐ろしい所で、出来ることならば一生日本にいたいと考えていた私にとっては、この短期留学はとても大きな挑戦でした。しかし、実際に行ってみると、案外普通に生活ができ、日本とは異なる街並みなどの文化に触れて楽しいと感じるようになりました。帰国するころには、フランスを恋しいと感じ、また絶対に行きたいと思うようになっていました。私は、このような自分の気持ちの変化がこの短期留学を通して得られた最も大きいものだったのではないかと思います。また、同じプログラムに参加していた人と出会って、自分が今まで過ごしてきた世界がいかにちっぽけだったかが分かりました。自分に足りないことにも改めて気づくことも出来ました。現在、私は在学中に１年の留学をしたいと思っています。これからも語学力の向上を目指して頑張っていきたいと思います。自分の考えを変えることが出来たので、短期留学に参加して本当に良かったです。この経験を今後に生かせるように努力していきたいです。

ストラスブール大学での短期研修

生活科学部／人間生活学科／生活文化学講座　２年　小野七海

8 月 10 日から 28 日までのフランス語研修プログラムに参加した。語学のコースは平日に 4 時間で、火曜と木曜の午後は選択制の授業があった。クラスは初日の試験の成績で三つに分かれていた。授業中は主にフランス語しか話せないので、学習歴が短い私は内容が分からないことも多くて苦労した。一週目と二週目の金曜日には小テストがあって、その結果はプログラム全体での成績評価に繋がっていた。また、大学主催で様々なアクティビティが提案されていた。美術館やワインセラーの見学などがあり、有料のものと無料のものがあった。

ストラスブール大から徒歩 15 分の距離にある、Amitel という指定の宿泊施設に滞在した。市中心部、観光名所の大聖堂にも程近かった。治安は概ね良いが、日没が遅く、夜 9 時頃まで外は明るく騒々しかった。個室は冷蔵庫、ユニットバスなどがついていたが、冷暖房設備はなかった。地下に有料の洗濯機があるが、10 セント硬貨以上は使用できなかったので、洗濯物は自室で手洗いした。キッチンはレセプションの開いている時間に借りられた。

ストラスブールは地方都市ではあるが、歴史が長く観光地として名高い。テロ警戒中の為か、武装した兵士によるパトロールが一日中行われていたが、中心部は平日・休日の別なく賑わっていた。プログラムの始まる前はドイツのベルリンを、滞在中の土曜日にはパリを少し観光したが、そうした都会とは違う良さを感じた。ストラスブールには、知らない人にも気のいい人が多いと思った。すれ違う人と目があうと決まって微笑まれたり、Bonjour！と挨拶されたりしたのは非常に印象深かった。フランス人は「他者」への警戒心が強く、冷淡であるというネガティブなイメージは全くもって覆された。ストラスブールは特異なのかもしれないが、ここでのたった三週間の生活体験は、すっかりフランスに対する好感情を植えつけることとなった。

ストラスブール大学短期留学を終えて

理学部　数学科二年　山口裕衣

私はフランスのストラスブール大学で第三言語を学ぶという約三週間のプログラムに参加しました。

研修内容について

私が参加したこのプログラムではまず初日にフランス語のテストがあり、成績順によって三クラスに分けられてフランス語の発音、文法、リスニング等を学びました。授業内容はそれほど複雑なことをしていたという訳ではないのですが、私はフランス語を習い始めたばかりで右も左もわからない状態で参加してしまったため、先生のおっしゃっていることや質問の内容が聞き取れずより一層難しく感じてしまったというのもあり授業についていくのがとても厳しいと思ったのが現状です。短期留学に行く前にストラスブール大学でのプログラムの内容を尋ねた所、英語でフランス語の授業を学ぶという返答をいただいたのでフランス語が全くわからなくても参加できるのではないかと思ってしまったのは私の過失でした。実際の授業は全てフランス語で行われており、第三言語を第二言語で学ぶというプログラムでもある程度現地の言葉を理解し、現地の人と日常会話ができるレベルまで到達していなければ実際の所短期留学することは厳しいと感じました。課外授業は通常授業が半日あり、空いている午前又は午後の時間に自分の気になるプログラムに参加の申し込みをし、授業費とは別料金で支払い行くという様になっておりました。プログラムは、酒蔵の案内、パーティー、タルトフランベ、ユーロ、船に乗って観光、バーベキュー等がありました。参加率は結構よかったように感じます。

フランスでの生活、滞在先

私たち、大学から同じプログラムに参加した生徒たちは大学から徒歩十五から二十分程の所にある寮を借り、そこで生活をしました。その寮は、人によって部屋の大きさ、机、収納スペース等が多少の異なりは見受けられました。キッチン、共有スペースの使用料は家賃に含まれており使用できました。キッチン器具は有料でレンタルすることも可能でした。寮の近くや大学の近くにスーパーがありそこではキッチン用品、文房具、食品等がそろっており、大変便利で重宝しました。水や食品の値段は日本とそれほど大きな差もなく、醤油など

の日本製品も割高でしたが取り扱いはありました。レジ袋は有料でしたがエコバックも手頃な値段で売ってありましたので大して支障はきたさないかと思いました。ストラスブールは大して大きな町ではなく、大聖堂が遠くから見ることが出来たので地図を持たずに歩き回っても寮の場所がわかったのもありがたかったです。大聖堂は有料で螺旋階段をのぼることができ、のぼるとストラスブールの景色が一望できました。フランスにはパン屋やアイスクリーム屋や薬局が数多く存在していました。

フランスと日本の違い

フランスは薬局がとても多く、パン屋ではケーキやチョコ等も一緒に取り扱っているお店を多く見ました。又、パン屋ではお客が自ら自分の欲しいパンをとる日本と異なりフランスでは店員さんがお客さんに言われたものを取る方式でした。このような些細な異なる点は多くありましたが、どちらもその国柄や雰囲気が感じられてとても嬉しく感じました。

短期留学を終えて

私自身の今回の短期留学の結果として、長期の旅行として見れば充実しており、よかったのではないかと思いましたが、短期留学としてみると事前の勉強不足であったと深く反省しております。しかし、日本においてでも、どの国においても完璧に現地の言語を話すということが大切であるということではなく、ジェスチャー等の様々な手段を使うことによって『伝えたい』という意識や気持ちが大切であるということを改めて実感しました。また、今回の留学の目的であったその国独自の『文化』を身近に感じることやその国の雰囲気、多種多様な人の『考え方』を感じることによって、自分の中にあった固定観念を崩すことができ自分自身の成長のための大きな一歩につなげることができたので短期留学をしてよかったと思いました。

ストラスブール大学留学を終えて

文教育学部　芸術・表現行動学科　舞踊教育学コース
3 年　長谷川 絵理

研修内容について

フランス語と現地ストラスブールの文化について学びました。1 日のスケジュールとしては、午前中 4 時間がフランス語の授業、午後からは課外活動や自由参加の授業等があります。フランス語の授業については事前のテストで 3 つのクラスに分けられます。私は最も初心者のクラスでしたが、そのクラスでは初歩的な文法や基本的な挨拶、会話表現を学びました。ペアワークをしたりちょっとしたプレゼンをしたりと、話す機会が多かったように思います。課外活動は事前の申し込み制です。クルーズや美術館へ行くプログラム等有料なものもありました。ですが限られた時間の中、様々な形で現地の文化に直に触れられるという経験は大変貴重なものであったと思います。午後からの授業は主に文化的な内容で、フィールドワーク的な活動もありました。

滞在先について

大学まで徒歩 15 分ほどの施設に宿泊していました。ひとり 1 室の部屋にベッド、机椅子が備え付けられています。洗面台、トイレ、シャワーがまとまって入っていましたが、アメニティ等は一切ありません。冷蔵庫は部屋に入れていただけます。食事については大きなキッチンがあり、そこで自炊することが可能です。調理器具は有料ですが借りられます。大学までの道に大きなスーパーがあるので、食料や食材はそこで調達できます。そこのスーパーには日用品等生活に必要そうなものは揃っているので、こだわりがないのであれば日本から持って行かずに現地で使うものを購入するということも可能かと思います。洗濯に関しては洗濯機を使うこともできたようですが、夏場で薄着だったこともあり部屋での手洗いで済ませました。ヨーロッパは空気が乾燥しているのですぐに乾きます。

現地生活・現地の人々について

行った時期が 8 月のサマータイムであったため、日が沈むのが遅く序盤は夜の 9 時頃まで明るかったです。不思議な気もしましたが、日照時間の違いからも異国であることを実

感しました。フランスの店は閉まる時間が 19 時や 20 時と比較的早く、日曜は休みのところが多かったです。コンビニのような 24 時間営業の店はありませんでした。多少不便と感じることもありましたが、日本がいかに便利な国であるかを思い知らされました。しかしそれだけでなく、日本のせかせかとした生活とは対照的なフランスのゆとりある生活を垣間見られたような気がします。

現地の方々はよく挨拶をしてくださいました。同じ宿泊施設内で初めて顔を合わせた方や、特にお店の方。店員さんはお店に入るときと出るとき、必ず挨拶をして下さり、客もそれに返します。文化として挨拶を交わす習慣があるということを目の当たりにし、人との関わり合いを大切にするのだなという風に感じました。

同じ留学に参加されていた方や宿泊施設で知り合った方などとお話しする機会は何度もあったものの、自分の言葉が通じないことを恐れてか、なかなか自分から積極的に会話をすることをしませんでした。せっかく時間とお金を費やして日本では置かれえない環境に身を置いていたのだから、自分の言語力を試しコミュニケーションをはかる能力を少しでも身に着けるという意味でも、もっと話してどんどんフランス語を使うべきであったと感じています。完璧な文章でなくとも単語を並べて伝えようとすれば、相手がわかってくれることも多いのかなという感覚はありました。はじめから自分の言語力は未熟だから、どうせ伝わらないからと思っていては上達も何もないです。自分の言葉が伝わるか、いかに完璧な言葉を話すかというよりも、相手に伝えたいという意思や、何としてでも伝えようと努力する姿勢が大切なように感じました。

ストラスブール大学　短期研修

文教育学部言語文化学科１年　渡辺采香

私はストラスブール大学での 3 週間のフランス語コースに参加しました。それまでストラスブールは名前しか聞いたことのなかった場所でしたが、3 週間の滞在を通してこの街が好きになりました。

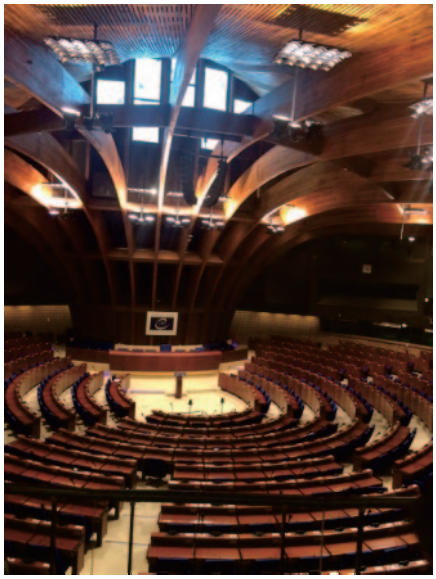
ストラスブールはフランスとドイツの間で何度も所属を変えたという歴史のある街です。ストラスブールの歴史を授業の中などで調べたり、話を聞いたりすることを通して、島国である日本に住んでいるとあまり実感することのない、国境というものへの認識が改まるよい機会となりました。

ストラスブールの規模は大きすぎず小さすぎず、路面電車などの交通機関も整備されているので、非常に過ごしやすい街でした。イル川に囲まれた街の中心地に高くそびえるノートルダム大聖堂や、アルザスの伝統的な木組みの家屋が密集しているプティット・フランスなど、歩いてすぐ回れる観光名所が多く、楽しい滞在となりました。少し足を伸ばせばライン川を越えてドイツまで行くことができ、留学先でできた友人たちとドイツ観光をしたことはよい思い出となりました。

授業は、3 つのコースに分かれており、私は一番下のコースで学びました。フランス語初学者のためのコースで、少人数のクラスで簡単な挨拶から動詞の活用などをやりました。最初は私がこの春フランス語を始めたばかりであること、そんな状態なのにいきなりフランス語でフランス語を学ぶことに大きな不安を感じていましたが、先生やクラスメイトのサポートもあり、すぐに慣れました。少人数の授業であったため、先生が生徒一人ひとりの理解度を確認しながら丁寧に授業を進めてくれ、何か理解できないこと、分からない単語などがあったらすぐ訊くことができました。

フランス語で言われたことを 100%理解するのは滞在期間の最後まで難しいことでしたが、3 週間のコースが進んでいくにつれて、だんだんフランス語に耳が慣れてきたように感じました。自分のフランス語の進歩を感じる一方で、まだまだ不十分であることを強く感じ、もっと喋ることができるようになりたいと思いました。今回の滞在で、今後の日本での

フランス語学習へのモチベーションも上がりました。



普通の授業以外にも自由に選択して参加することができる授業や活動も用意されていました。自由参加の授業では、フランスの教育システムやアルザス地方やストラスブールの歴史について説明を受けたり、自分で調べたことを発表したりしました。ストラスブールの文化や歴史について紹介したり、留学生同士が交流したりする活動もありました。主な内容としては、水上バスでの観光、欧州評議会への訪問、古城探訪、ワインカーブの見学などです。このように学校の企画で様々な場所に訪れることができ、非常にいい経験になりました。

이화여자대학교
EWHA WOMANS UNIVERSITY

韓国

参加者 3 名

梨花国際夏季大学セッションを終えて

生活科学部　食物栄養学科　２年　齋木美果

＜研修内容＞

今回参加した梨花国際夏季大学セッションⅡは韓国語の講義だけでなく、韓国の伝統的な文化や音楽、韓国の情勢などが教われる特別講義もあり、多方面から韓国を知ることができるプログラムでした。午前中は語学の学習、午後は特別講義とそれに対応したフィールドトリップが行われるといったスケジュールでした。

語学の講義は入寮の次の日に受けたテストによってクラス分けがなされ、そのクラスで２週間授業をしました。語学の先生方はとても優しく、また面白く授業を行ってくださったので、毎日楽しく授業を受けることができました。またただ単に文法を習うだけでなく、習った文法をクラスメイトとの会話や発表で実践的に練習することができたので身につきやすかったように感じます。また日本で韓国語を学ぶのとの大きな違いは、習ったことを日常生活で実践することができる点だと思います。習ったことを試してみて通じたときはとても嬉しく感じました。左上の写真の建物は梨花女子大学のメインの建物であるECCです。私たちはこの建物の中の教室で講義を受けました。

フィールドトリップでは、旅行するときには行かないような場所や日本語ガイド付きの博物館・記念館の訪問などがあり、韓国について教科書やガイドブックには載っていないことなどを深く学ぶことができました。左の写真はフィールドトリップで北村韓屋村に行ったときのものです。ここは昔ながらの建物が建ち並ぶ町で、実際にまだ人が住んでいることに驚きを感じたとともに昔の街並みを大事にする考えが日本と共通しているような気がしました。

＜滞在先＞

韓国での滞在先は大学内の寮でした。寮は１人部屋と２人部屋を選ぶことができ、私は２人部屋を選びました。ルームメイトは日本の方だったので、会話に苦労することなくすぐに仲良くなることができました。友人は日本人ではない方がルームメイトになり、会話に苦労

したり考え方が違ったりして大変そうでしたが、最終的には仲良く過ごせたようでした。

＜韓国での生活・現地の人々＞

留学に行く前までは韓国は日本と似ているとよく耳にしていたので、語学以外ではそこまでの違いはなく、苦労することもないと思っていました。ですが国が違えば、そこに住む人たちの生活様式や考え方、対人関係は違うものです。実際行ってみると、日本と違うところが多くあり、慣れるまでに時間がかかりました。日本での生活環境が他の国でも一般的であるということではないことを学びました。

現地の食堂の方たちは優しく、頑張って韓国語で話すとしっかりと耳を傾けて返事してくださり、親近感を持てる方たちばかりでした。また梨花女子大学付近の服屋や靴屋、帽子屋の店員さんたちも気さくな方ばかりですぐに仲良くなり、値引きなどもしてくれました。

今回の留学を通して、韓国語はあまり上達できませんでしたが、日本語以外の言葉を話す勇気を持てるようになりました。また様々な国籍の人たちと交流ができて、いろんな考え方や生活の仕方などを知ることができて、とてもためになりました。そして何より日本語以外の言語で話した時に、通じ合えた時の嬉しさはこの上ないものに感じました。今回の留学で感じたことを忘れずにこれからの生活、将来の仕事で生かしていきたいです。

韓国梨花女子大学短期留学を終えて

人間発達科学専攻　心理学コース　修士１年　山内望美

⚘授業内容

平日の午前中は、レベル別に分けられたクラスで韓国語の授業を受けました。日本人だけではなく、欧米からもたくさんの学生が来ているため授業は全て英語でした。私は韓国語を勉強するのが初めてで、留学前は「アニョハセヨ」しか言えませんでしたが、２週間の授業を通して、最終的にハングルが全て読めるまで上達しました。新しい言語を勉強することは、時に挫折を伴いますが、クラスメイトがいることで疑問や不安を共有し、切磋琢磨できます。そして、学校の外に出た時に、公共機関を利用し駅名が読めるようになっていたり、飲食店のメニューに書いてあるハングルを読めるようになっているのを毎日体感することによって、言語の楽しさを改めて感じることができました。

⚘フィールドトリップ

今回の留学の主要な内容とも言えるのがフィールドトリップでした。間違いなく全員が一番記憶に残っているであろう安東（アンドン）での１泊二日の宿泊体験。さらに、平日の午後は毎日異なった分野での韓国文化の講義を聴き、その内容に沿った場所へ行ったり、体験をしました。

・安東での１泊二日旅行

まだ授業も始まる前の最初の二日間、学生同士も打ち解けていない状態で、バスに数時間揺られ安東に行きました。ここでは、伝統芸能の鑑賞や、川下り、そして１枚目の写真の民家への宿泊をしました。普段私たちが触れることのできない昔ながらの生活、それがここには残っていました。夜は、一畳くらいの部屋に３人で川の字になって蚊帳を覆って寝ました。慣れないせいか、正直楽しいと感じることはできず、辛かった記憶しかありませんが（笑)、一生忘れないであろう経験ができたと思っています。

・韓国料理作り

クッキングスタジオで４人１組でキンパブ（海苔巻き)、プルコギ、チャプチェを作りました。日本でも韓国料理は馴染み深く気軽に食すことができますが、本場で先生に教えてもらいながら作ったものは、今まで食べてきたものとは気持ちの面でも異なり、美味し

く感じられました。

他にも、戦争記念館や美術館へ行ったり、歴史映画を観たり、劇場でミュージカルを鑑賞したりと、多方面から韓国文化に触れることができた２週間でした。

⚘卒業

この度の留学は２週間という非常に短い期間であったため、語学の上達よりも韓国という国をもっと詳しく知ることを目的にしていましたが、有難いことに、ハングルが読めるようになったため語学に関しては自分の想像以上の収穫を得られたと感じています。しかし、ハングルが読めたから何か出来るわけでも、進路に役立つわけでもありません。韓国語を堪能にするためには、これからもっともっと勉強する必要があります。「好きこそ物の上手なれ」ということわざがありますが、今回の参加者の大多数がＫポップや韓流好きで、彼女たちは映画や歌を通して韓国語を楽しみながら学んでいるように見えました。ただ、語学を伸ばしたいと願うのではなく、その国の背景や文化も共に理解していくことの重要性を感じました。貴重な経験を無駄にしないために、韓国語をこれからより勉強し、進路に影響するほどまで伸ばせるよう努力していきます。

⚘留学を通して感じたこと

日本のお隣の国、それが韓国です。容姿や文化は似ている部分もあるでしょう。しかし、実際に韓国で生活してみて感じたのは、表面的に似ていても全く異なった世界がそこにはあるということでした。日本、韓国を比較するのは難しく、それぞれ良い点も悪い点もあります。今なお、政治的や歴史的に衝突することの多い二国ですが、お互いの良いところを尊重しあい、高めあえる関係になれるように努力することが大切だと感じました。

梨花女子大学夏季短期プログラムを終えて

（匿名希望）

授業内容

午前中に韓国語の授業が２コマあります。プログラムのはじめに行われるテストの出来によってクラスが分かれているため、自分に合ったレベルのクラスを受講できます。午後からは、韓国文化についてのレクチャーが英語で行われます。毎日違う内容で、ドラマや映画、北朝鮮との関係、女性の社会的地位、世界における k-pop、伝統的な楽器についてのレクチャーでした。最終日には韓国語の授業内容が範囲になったテストがありました。普通の授業の他に、安東市というところで宿泊をして文化体験をするというものがプログラムのはじめにあります。上の写真は、安東市で高いところから韓国伝統家屋の村、韓屋（ハノク）村を見下ろしたものです。

フィールドトリップ

午後のレクチャーの後、フィールドトリップに行きます。大体はその日のレクチャーの内容に関連した場所へ行きます。私たちは、北村韓家村、博物館、戦争記念館、料理教室、ダンス教室、水産市場などへ行きました。料理教室では、キンパ、プルコギ、チャプチェを作りました（写真）。ダンス教室では日本語バージョンの曲もある、少女時代の gee の振り付けを教えてもらいました。国立博物館では、日本語を話せるガイドの方に丁寧に説明していただきながら古代の器などを見、昔の日本との繋がりなどを感じました。また、大学から離れたところに行く場合、地下鉄やバスで行き、地下鉄の場合現地解散、バスの場合大学まで送ってくれる他に都心で降ろし

てくれるので、この後も観光を楽しめました。

現地での生活

　現地では大学寮で生活しました。ちなみに、韓国では寮のことをキスクサといい、漢字にすると寄宿舎になります。ここでは私は二人部屋で、ドイツから来た三歳年上の人と二週間近く過ごしました。寮は綺麗でしたが、文化の違いで困ったことがいくつかありました。例えば、私の方が後に寮に到着したのですが、その時既に彼女は部屋の中で土足だったので、私もそれで過ごしました。寮では料理ができないので、食事は全て外食でした。梨大の周りはもちろん、隣駅の新村まで歩いて行くと本当にたくさんのお店があるので困りませんでした。また日本とは違い、韓国は食事がとても安かったので助かりました。
このプログラムを通して、更に語学力を高めるために、今まで以上に勉強しなければならないと思いました。言語というのは結局、単なる道具であり、それを使って思っていることを伝えたりしてはじめて意味をなすものだと思います。次行った時は今回以上に不自由なく韓国語を使えるように、日々の学習を怠らずやっていこうと思いました。

universitätbonn

Germany

参加者４名(報告書３名)

帰国報告書

文教育学部人文科学科２年　大城夏希

私はドイツのボン大学のサマープログラムに参加しました。ボンは西ドイツの首都であった街です。その名残か、最近では世界遺産会議がボンで開かれるなど今でも国際会議が行われる街です。私が参加を決意した理由の１つに、このボンという街の歴史を見てみたいということがありました。

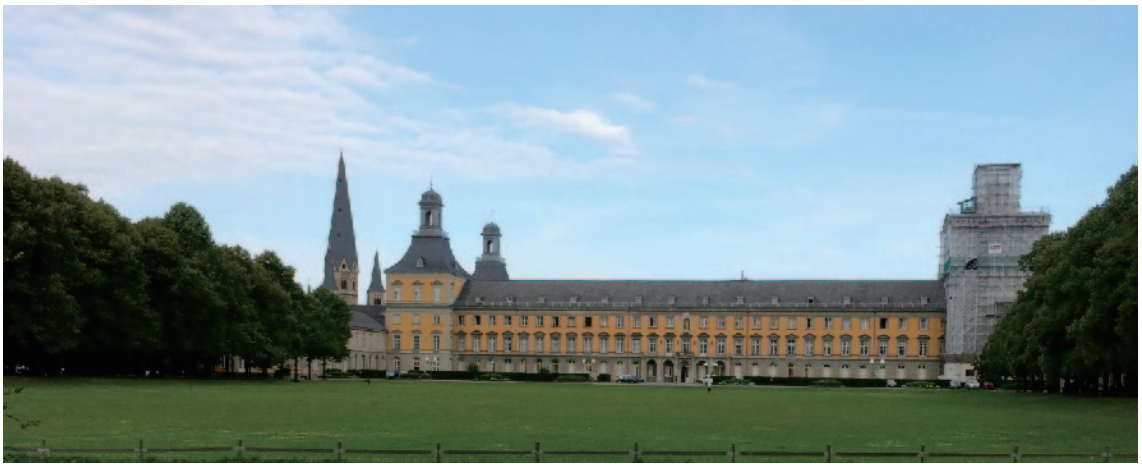
研修内容は、ドイツ語とドイツ文化ということで、主に午前中にドイツ語の授業、そして午後からはボン近隣の街の観光やドイツ語のコーラスを行うなど、とても濃い１ヶ月間でした。語学の授業では、私たちがドイツ語初心者であるということもあり、先生がとても丁寧にわかりやすく教えてくださいました。また文法事項だけでなく、実際に話す機会が多く設けられており、最近あった出来事など身近なことを交えた授業だったため、授業の内容をすぐに実践できたということは良かったなと思います。

観光では、ボン近郊の都市にたくさん行くことができました。大学のプログラムに観光が含まれているからこその魅力として、詳しい説明が聞けたということが挙げられます。この観光を通して、ドイツの歴史や文化を少しずつですが学んでいけたのではないかと思います。中でも感動したのはケルン大聖堂です。教科書でしか見たことがなかったものが目の前にある。実際に見たケルン大聖堂は思っていた以上にとても綺麗でした。他にもトリーアやブリュールなど様々な観光地に行く機会があり、１ヶ月間とても密度の濃い時間を過ごすことができました。

コーラスでは、サマープログラムに参加している世界各地から来た留学生たちとドイツ語の歌を歌うという貴重な経験ができました。コーラスの中で、みんなで１つのものを作り上げるという経験が出来たということはとても良かったなと思います。ドイツ語の歌を４曲分覚えるのは大変だったのですが、みんなで休み時間などの合間にコーラスの練習をしてなんとか歌えるようになりました。最後にみんなの前でコーラスの成果を発表する機会があったのですが、短い間ではあるけれどサマープログラムで一緒に過ごしたコーラスの仲間たちのおかげで本当に楽しく歌うことが出来ました。

また、ボン大学のサマープログラムでは空き時間など比較的自由な時間もあるので、各自で行きたい場所に行くこともできました。私が特に印象に残っているのはマインツです。マインツでは、ブンデスリーガの開幕戦を観戦しました。本場でサッカーを見ることができ、マインツファンの方々とお話しや応援することができてとても楽しかったです。

今回ボン大学のサマープログラムに参加して、私は話すことの大切さを実感しました。その中でコミュニケーションをとる手段としての語学力の必要性を身をもって学ぶことができたのは、今後の生活に非常に役に立つのではないかと思います。特にボン大学のサマープログラムでは、授業や生活等でドイツ語に触れる機会もあり、また留学生同士の交流が盛んであるため、他の言語に触れる機会も多くありました。私はドイツ語初心者なのでドイツ語では簡単な会話しかできません。留学生同士の会話では英語を使うことや、時には中国語で会話をすることもありました。相手と会話ができればそれだけ世界も広がっていく。このことを体験できたことは私の大きな財産となるのではないかと思います。



ボン大学サマーコースを終えて

文教育学部言語文化学科仏語圏言語文化コース 2 年
飯尾綾加

授業内容

平日の午前中はドイツ語の授業が行われました。それぞれのドイツ語のレベルに合わせたクラスに分けられ、わたしはドイツ語を全く勉強したことがなかったので初心者のクラスでした。行く前はドイツ語が全然できないということで大丈夫かなと心配していたのですが、同じクラスの子たちも同じような感じだったので一緒に一からドイツ語を勉強できて楽しかったです。先生はとても面白く優しい先生で、ドイツ語をドイツ語で勉強するという環境だったので普通に勉強するよりもドイツ語になれるのが早かったように思えます。クラスメートはみんな国籍が違って、とてもインターナショナルな空間でした。私の先生はドイツ語を書くことより喋ることを大切にしていたのでペアワークやひとりひとり話す機会が多く、クラスメートと仲良くなることができいろいろな国の話を聞くことができたので興味深かったです。このクラスでドイツ語を勉強できて本当によかったなと思います。

課外活動

週に 2 回ほど授業が終わった後、サマーコースの参加者といろいろな場所に出かけました。わたしはこの課外活動がこのコースの良いところだなと思って参加したので、とても楽しみにしていました。トリーアやアーヘンに行ったり、ワインの試飲などいろいろな体験ができ、とても楽しかったです。また博物館やお城の見学ではドイツ語と英語のふたつでガイドをしてくださったので英語の勉強にもなりました。

ドイツでの生活

わたしは寮で生活していました。同じ階の 7 人でキッチン・トイレを共同で使っていましたが、清潔でとても快適に過ごすことができました。その中の台湾人の方と仲良くなり困っていると助けてくれ、その方の誕生日パーティーにも参加させてもらいました。そこではドイツ語・英語・中国語・台湾語・日本語が飛び交うという非常に楽しい経験をさせてもらい

感謝しています。寮のチューターさんもとても優しく困っていることはないかと聞いてくれたり、もっとドイツ語を使うように心がけないとだめだよと言ってくださって私のドイツ語の練習に付き合ってくれてもっとドイツ語を話せるように積極的に話していかないといけないなと強く思いました。そしてボンの街は治安も良く非常に住みやすかったです。旅行ではなかなか味わえない生活をできたのが本当に良い体験であったなと思います。

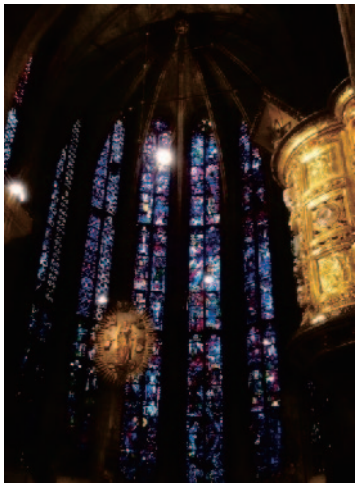
サマーコースに参加して

わたしはただただドイツに行ってみたいという思いだけでこのボン大学のサマーコースに応募しました。ドイツ語もやっていなかったのでなかなか無茶なことをしたかなと思ったのですが、行ってみると意外と生活ができました。でも自分の語学力のなさのせいでサマーコースでせっかく友達になった子たちといろいろな会話ができないというのが悔しかったです。またこの 1 か月で一番ひしひしと感じたのは、同じ英語でも聞き取るのが難しかったり、聞き取ってもらえなかったりこんなにも違うのだなということです。わたしは今回初めていろいろな国の人と交流したので驚きました。自分の英語力に自信がないから自分から話しかけるということがあまりできなかったので、もっと自分に自信が待てるように英語を勉強していきたいと思いました。そしてドイツ語も好きになったので、せっかく現地でドイツ人に教えてもらったのでこれからもドイツ語の勉強を続けていきたいと思います。失敗を恐れないということが大切だと思いました。ちゃんとしたドイツ語じゃなくても自分が一生懸命話そうとしていたら相手の人も聞こうとしてくれます。そういうことを積み重ねていって徐々に話せるようになることだなと思ったので先生にも教わったように喋るということを重視していきたいと思います。ドイツ語だけでなく英語も同じだと思うので自分で話す機会をたくさんつくっていきたいなと思います。

日本から離れて生活することでいろいろなことを感じ考えることができ本当に参加してよかったです。サマーコースで出会った人たちともう一度会った時にはもっと話せる自分になっていられるように頑張りたいと思います。

ボン大学サマーコースを終えて

文教育学部人間社会科学科 3 年　　林明日美



プログラムの概要

事前に行ったオンラインテストの結果に基づいてレベル別の 11 のクラスに分かれました。1 クラスの人数は 10～15 人程度です。平日の午前中が授業で、週 2 回午後に行われるワークショップと遠足に参加しました。プログラムには世界中から約 150 人が参加していましたが、日本人が一番多かったです。運営はボン大学の院生が行っており、私たちをサポートしたり盛り上げたりしてくださいました。

授業

私は下から 3 つ目のクラスだったのですが、授業は基本的にはドイツ語で行われ、理解できないときは英語でも説明してくださいました。また、取り扱う文法項目や学習方法に関して、私たち生徒の希望を聞きながら進めていただきました。日本での学習で文法は一通り終えていたのですが、ネイティブならではのニュアンスや言葉の選び方など、独学では学ぶことが難しいことも教えていただけたので、大変満足できました。ゲームや会話を取り入れた授業に加え、他の参加者とドイツ語で話す機会も多かったため、短期間で語学力は格段に上がったと思います。

ワークショップ

ワークショップは、ドイツ語のコーラス、ドイツ文学、ゲーム形式で身に着けるグラマー、写真を使って単語を学ぶ、ドイツ語の語源について、ボキャブラリーを増やす、会話の練習、などの中から一つ選んで参加するというもので、私はコーラスを選びました。音楽的には本格的なものではありませんでしたが、発音はこだわって丁寧に教えていただきました。

遠足

遠足では、トリーア、ケルン、ブリュール、アーヘン、ブリュッセル、エルツ城に行きました。その他に、大学周辺の博物館見学やライン川クルーズパーティーもありました。町や聖堂、博物館の見学には必ずガイドが付き、ドイツ語か英語を選ぶことができました。ガイ

ドのおかげでただの観光にとどまらず、ドイツの歴史をこの目で見て学ぶことができたのは非常に良かったです。

ドイツでの生活

私は大学の寮で生活しました。部屋は一人部屋で、各階ごとに共用のキッチンとトイレ、シャワー、棟ごとに洗濯機と乾燥機がありました。ドイツでは普段寮に住んでいる学生が帰省している間に部屋を貸し出すという制度があるようです。キッチンはありましたが、調理器具や調味料を買いそろえるのはもったいないと思ったので自炊はしませんでした。食事は、朝はスーパーで買ったパン、昼は学食、夜はお店に食べに行ったり、遠足先で済ませたり、日本から持って行ったご飯を食べたりしました。ドイツは多民族国家でもあるので、食事も多種多様でした。学食ではベジタリアンやイスラム教、ヒンドゥー教の人に考慮したメニューも用意されていました。

ドイツに来て最初に驚いたのは、電車やバスのチケットを確認しないということです。時々係員が抜き打ちで確認しにくるそうですが、改札がないので誰でも入れます。それでも経営が成り立っていることは、ドイツ人の誠実さを表しているように思いました。逆に、日本の電子的に制御された料金システムは先進的なのかもしれないと初めて思いました。

ボンは治安も良く、現地の人にも助けていただき、全体的には不便なく生活できました。一方、清潔さやマナーの点では、日本の良さ、快適さを改めて実感した一か月でした。

その他

プログラム中は、様々な国の人と話したり、一緒に活動したりする機会がありましたが、そこで国民性の違いを感じることができました。日本人も含めて、それぞれ良いところも悪いところもありましたが、価値観の違いを受け入れ、理解しようとすることで、自分の視点を広げることができたのではないかと思います。

また、プログラムに参加した理由を何人かに聞いたのですが、その話が私にとっては良い刺激になりました。ほとんどが日本人でしたが、皆自分の専門についての知識と自身の考えや目標を熱心に語ってくださいました。その内容も新鮮で興味深いものでしたが、何よりも自分が勉強していることや仕事にしていることについて自分の言葉で語ることができ、具体的な目標を持ってそのために努力していることが本当にすごいと思いました。私にとって、日本人も外国人も含めて様々な考えを持った人と知り合えたことが一番の収穫でした。

Universiteit Utrecht

The Netherlands

参加者１名

ユトレヒト大学サマースクールを終えて

文教育学部言語文化学科　東出瑛江

〈研修内容について〉

今回私が参加したコースはオランダ語の初級クラスでした。初回の授業でテキスト等が配布され、そのテキストに沿って授業が行われました。１日９０分の授業が２コマ有り、英語とオランダ語で講義は行われ、主にスピーキングやリスニング形式ですすめられました。１コマ目と２コマ目の間に自習時間がありライティングやリーディング形式の問題が課題として出されました。同じクラスには社会人で 40 歳近い方もいて、18 歳の私が最年少でした。

〈滞在先について〉

サマースクールの２週間は大学の寮に滞在しました。寮の部屋にはベッド、棚、デスクと椅子、洗濯物干しがあり、wi-fi ルーターも設置されていました。共用のキッチン、シャワールーム、トイレ、洗濯機、冷蔵庫がありましたが、トイレは男女の個室がそれぞれ１つずつで隣り合っていたので初めは少し使うことに抵抗がありました。寮の同じフロアには様々な国籍の学生が 10~15 人ほど滞在していました。

〈現地での生活について〉

寮が市街地から少し離れた場所にあったので、通学や食料品の買い物などにはバスを使わなければならなかったのですが、短期滞在の留学生のためにサマースクールオフィスで１週間もしくは２週間用のバスチケットが販売されていたので、滞在中はそのチケットを使っていました。食事は基本的に自炊なので週に何度か教室近くのスーパーに買い物に行っていたのですが、スーパーなどの閉店時間は日本に比べて早く（バーやパブは夜遅くまで営業しています）、日曜日は営業していないお店も多いので買い物はなるべく平日の昼間にすませるようにしていました。

滞在期間が短かったこともあり、あまり遠出することはできませんでしたが、同じクラスでオランダ在住の中国人の友人が、博物館などに無料で入館できるミュージアムカードを貸してくれたのでユトレヒトにある博物館巡りをすることができました。ユトレヒトにはオルゴール博物館やセントラルミュージアムなど多くの博物館があり、中心部のドム塔と合わせて観光客も多く訪れていました。

ドム塔の近くには土産物店や商店街、カフェなどがありいつもとても賑わっているのですが、一つ注意が必要なのはオランダで言う「カフェ」は日本のカフェと同じものであるのに対し「コーヒーショップ」はドラッグを販売しているお店であるということです。オランダでは一部のドラッグが合法なので、街中でコーヒーショップを見かけることが時たまありました。

ほとんどのオランダ人が英語を話すことができるので、買い物や観光をする中で困ることはほとんどありませんでした。

今回の滞在は 2 週間という短い間ではありましたが、様々な国から来た学生たちと交流する中で非常に刺激を受けたと同時に、自分の語学力向上の必要性をとても強く感じました。長期留学に向け、まずはよりいっそう英語の勉強に励もうと思います。

研修参加者からのAdvice＆研修先でのTips

※ここでは、各研修先に関する情報や、留学に対するアドバイスが見られます。
※実際の声を伝えるため、みなさまの原文のまま載せています。

University of Manchester（イギリス）

１．授業に関して

・電子辞書を使っても全く怒られないし問題ない。
・電子辞書は使わず教室にある英英辞書を授業中にはつかった
・文法の問題よりもとにかくしゃべることが中心。
・クラスには日本人が意外と多いです。
・母語が違う人の英語はそれぞれ訛りがあってちょっと聞き取りづらいです。
・月曜日から金曜日まで授業があり、金曜日以外は 9：30 から 15：30 まで、金曜日は 9：00 から 13：00 までだった。私がいたクラスは、リーディング、リスニング、ライティング、スピーキングを一通り行うが、スピーキングに重点が置かれている印象を受けた。
・教科書とワークブックが配布されるので、自習用に個人的に英語の教材を持っていく必要はないと思う。また、英英辞書が各教室に常備してあったので、それで十分な人は辞書も持ってくる必要はないと思う。
・授業は平日にあり、一つのクラスは 90 分で、朝 9 時 30 分から午後 3 時 30 分まであります。金曜日は午後 1 時で授業は終了します。学校が始まった初日にはクラス分けテストが行われます。授業は、Core Language Module と Target Module という二つのクラスがあり、 Core Language Module では文法、リスニング、スピーキング、ライティング、リーディングなどを勉強します。クラスによって内容は少しずつ違うと思いますが、プレゼンテーションをしたり、本を読んでブックレポートをしたり、オピニオンエッセーの書き方を学んだりします。宿題はほぼ毎日出されます。Target Module は、いくつかの授業が開かれているのですが、自分の大学が決めているプログラムによって、自動的に受けるクラスは決まっています。お茶の水女子大学は恐らく Integrated Skills with British and Manchester Cultural Studies というクラスに振り分けられると思います。このクラスではイギリス、特にマンチェスターの文化や祭り、家の様子を学びます。毎週金曜日に博物館や美術館、図書館を皆で訪れます。初めは先生の英語が聞き取れなかったり、それ以上に同じクラスの外国人の話す英語が聞き取れなかったりして不安だと思いますが、次第

に慣れてくるので大丈夫です。

・積極的になるべき

・USB は必須、パソコンもあった方が良い

・授業内で、必ずしも外国人と話す機会が得られるという訳ではありません。先生は全員外国人ですが、クラスによっては日本人のみ、というクラスもあります。

・授業でプレゼンテーションをするので、パソコンと USB メモリは持って行った方が良いです。

・クラスはスピーキング重視。

・USB を持っていくと便利。プレゼンテーションをする機会が結構ある

・初日にテストを受け、約 10 段階のクラスに分かれる

・基本の授業が週 10 コマ、イギリス文化について学ぶ授業が週 5 コマ

・毎日 3 コマずつ、9:30-11:00,11:30-13:00,14:00-15:30、金曜日のみ 2 コマ

・クラスは日本人とアラビア人（中国人・韓国人もいたが、私たちの留学の 1、2 週目で帰国）

・speaking 中心の授業、ほかにやりたいことがあれば提案しよう

２．生活に関して

・学校はもちろん寮の個室まで WiFi が通っている。無線だけでは心もとない人は有線ケーブルを持っていくと良い。

・洗濯が高い&面倒臭い。乾燥代金をケチる場合は洗濯紐、ハンガーなど必須。

・クレジットカードは絶対持っていったほうがいいです。

・貴重品用の小さいバッグがあると便利です。

・大学は寮を出て右方向に直進

・バスはマジックバスに乗る、ウィークリーチケットを買うと便利

・物価が高いのでお弁当箱など持って行って昼ごはんはお弁当にするとよい

・授業の後は、夕飯時まで時間があるので、学校そばの博物館や美術館などの無料の公共施設に足を運んだり、町中を散策したりした。寮の近くにコンビニと大型スーパーがあったので、買い物が便利だった。寮から学校までは、徒歩で約 40 分の距離にあったので、寮の前のバス停からバス通学する学生が多かった。自分も 1 週間のバスパスを 4～5 回ほど購入した。これらの購入は現金のみである。また、ラウンドリーは寮の入り口付近にあるので、距離的には便利だが、料金支払いが、現金ではなく、クレジットカードなどでチャージするタイプの専用のカードを購入しなくてはいけなかった。

・滞在先は大学の寮ですが、大学から随分と遠く離れています。一人一部屋、ベッドと洗面

台と机がある部屋が与えられ、キッチンとバスルームは 8 人で共有します。バスルームは二つありますが、浴槽がついていてきちんとお湯が出るシャワーと、浴槽がなくて熱いお湯が出ないシャワーがあります。部屋と FLAT は到着したその日に初めてわかるため、FLAT のメンバーが全員日本人で同じ大学だった人もいれば、たった一人で 1 週間を過ごした人もいます。寮の備品について、前の住人が残していったものは一切撤去されています。自分でハンガーや洗濯物干し、塩や胡椒などを持っていったほうがいいでしょう。キッチンにはまな板がなく、包丁もパン切り包丁と小さなナイフしかありません。また、マンチェスターはロンドンと比べて晴れている日が多く、昼には汗ばむほど暖かい日もありますが、朝晩が冷えます。それから、8 月は年度終わりの夏休みのため、現地のイギリス人の学生は皆いません。公演やワークショップといったものも 8 月には全くないので残念です。街の交通手段はバスで、いくつかバス会社がありますが、magic bus がもっとも安く、広い範囲を回ります。また、イギリスのヴィザの制度が変わったため、短期留学のような短い期間の滞在者はイギリス滞在中、国外に旅行に行くことはできません。イギリス国内の旅行をする時はネットで電車のチケットを予約していったほうが、当日窓口で買うよりも格段に安く買える場合が多いです。

・寮のベッドは布団が一枚しかなくて薄着で寝ると寒い
・食器、調理器具はフラットにより異なる
・洗濯機はあるが、面倒かつ値段が高いので、自分で手洗いしたほうが良いかもしれない
・カードは VISA の方が便利。JCB の子がいたけど、使えるお店が少なくて大変そうだった。
・物価はかなり高いので覚悟しておいた方がいい。
・寮の近くには 11 時頃まで開店しているスーパーがある
・昼食は節約のため、サンドイッチを作って持っていった
・サンドイッチを入れるタッパーがあると良い
・菜箸を持っていくと調理しやすい
・主要な調味料、シャンプーとリンスは現地で皆で割り勘して買うのがオススメ
・共用部分のそうじはやってくれる
・ハンガー及び洗濯物干しを忘れないこと
・部屋で履くスリッパ・サンダル等
・日曜日はお店の閉店時間が早いので注意
・寮は団体ごとに固められるため、日本人かお茶大生
・贅沢をしなければ 250 ポンドくらいで十分に生活できた（旅行代・お土産代などはのぞく）、それ以外にかけるお金は個人それぞれだが毎週の日帰り旅行の交通費・お土産代などでだいたい 400 ポンドくらい使ったのではないかと思う

・寮にあるランドリーの使用料金の支払いは circuit カードというカードにチャージしはお金で払います。チャージは現金ではなくクレジットカードを使って、ネットで行うのでクレジットカードは作っておいた方が良いです。
・カードにチャージする時に寮内にあるランドリーの支店名を聞かれますが、支店名は Oak House ではなく Owens Park Little Court です。
・寮から学校までかなり遠いので、バスを使う人が多かったです。毎日バスに乗るなら Magic bus というバスで使える Magic Rider という 1 ウィークパスを買うとお得かもしれません。Magic Rider はバスの中で買えます。値段は 7.5 ポンドでした。

３．その他

・外食やコンビニのサンドイッチは想像以上においしくないし高いので、荷物に余裕があれば日本食を持っていくべき。
・現地の学生が夏休みに入っている時期に語学研修を行うので、イギリス人の学生と交流する機会は、授業や学内ではほぼない。よって、町に繰り出す、店員に話しかけるなどしないと、先生以外のネイティブイングリッシュに触れる機会はあまりないと思う。だが、アラビア系、中国系、韓国系、ロシア系の学生と共に英語を勉強するので、なまりのある英語に触れる機会が持てる。また、学生の年齢層が広く 30 代 40 代で結婚して子供がいる人もいるので、ディスカッションの時などは、様々な意見が飛び交って楽しかった。土、日は大学の International Society という部門が提供するバスツアー（ただし、観光地へ連れて行ってくれるだけであり、観光自体は各自自由である。）に応募して、リバプール、ホイットビー、湖水地方などに行ける。また 8 月後半にバンクホリデーという祝日があり、3 連休が生じる。その時に、宿泊をして長期旅行に行くのがおすすめである。ちなみに、自分はロンドンへ 2 泊 3 日した。
・私は、留学前に授業の様子や何をするのかを知りたくて、図書館のグローバルスタディコーナーで週一回行われている留学相談会に行きました。そこで、マンチェスター大学に短期留学した方からお話を伺い、留学準備に役立てることができました。国際課のメールマガジンに自分のメールアドレスを登録しておくと留学相談会のお知らせが入ってくるので、登録しておいて本当によかったと思いました。この短期留学はお茶の水女子大学からの参加者が多いため、留学先でもすぐに友達を頼ることができて安心です。また、現地でも多くの日本人が留学に来ているのでそういった方々の話を聞くのもとても勉強になります。けれども私のクラスは 11 人中 10 人が日本人だったため、英語を使う機会を増やそうと、日本人どうしでも英語を話すなど工夫をしました。私は学校の授業が始まってすぐに自分の言いたいことを 100 パーセント表現できない悔しさと相手の言葉を聞き取れ

ない悔しさで英語自体が嫌になってしまった時期がありました。そんな時でもお茶大の人たちがいたので、日本語で話をすることができてとてもよかったと思っています。母語を使うことができるという幸せを実感しました。

・電車は電光掲示板とアナウンスで言っていることが違うことがあったので、常にアナウンスに気をつけたほうが良い

・意外と現地の人と話す機会がないため、日本人の友達と授業外でも英語で会話するのがオススメ。

・クラスでは同じ大学の人とばかりでなく他のクラスメイトにも積極的に話しかける。歳の離れたクラスメイトと話すと勉強になる。

・寮で料理をする時、大丈夫だろうと思っても火災報知器が鳴ってしまうこともあるので煙には注意すべき。窓を開けておいた方がいい。

・少しきちんとしたレストランでは、服だけでなくカバンにも、大きすぎないものなどとドレスコードがあったため、通学用以外にもカジュアルすぎないカバンがあるといい。

・自販機にお金をのみこまれることがあるので注意

・自分は日本食を持っていかなかった

・寒かったので厚手の上着は必須

・寒いので、薄手のコートなどあると良い

・授業で日本のことについて聞かれることがあるので、多少勉強しておくと良い

・音楽が盛んなので、特に英国音楽について知っておくと楽しい

・マンチェスター大学の公式 HP に、My Manchester という生徒専用のサイトがあります。在学中はそのサイトに入るためのアカウントがもらえますが、大学での最後の授業が終わるとすぐにそのアカウントは無効になってしまうので気をつけてください。Eduroam もすぐ使えなくなります。

・寮にある調理器具はあまり揃っていません。調理器具をいくつか現地で買うことになると思います。でもイギリスで菜箸は買えないので持っていくと便利だと思います。

・寮はベッドが個室でキッチン、お風呂、シャワーは共用。

・ クラスメイトとは積極的に会話すべき。

・あちこちに旅行に行きたいなら地球の歩き方は役立つ

・毎週土曜日に大学で無料でバスで観光地に行くことができる、しかしバスの出発時間が遅く、バスが壊れるなどのトラブルもあり、たくさん時間をとりたいなら電車のほうが確実

・外国人の友達は正直作りにくい、クラブ活動に参加したり、掲示板にポスターを貼るなどして積極的に動くべし

SOAS University of London（イギリス）

１．授業について

・宿題が結構出るので平日はなかなか帰った後に観光するのが厳しいですが、週末課題のようなものは出ないので週末は観光できます。

・生徒参加型の授業なので、間違いを恐れず発言することが大切です。

・とにかくたくさん話しましょう。細かい文法ミスを気にするよりも、せっかく英語漬けを強いられる環境にあるので、授業からなるべく多くのことを吸収して帰るのを心がけるとよいと思います。

・放課後外出したくなる気持ちもありますが、宿題は忘れずに！

・宿題にはちゃんと時間をかける、わからないことは隠さない、日本人以外の人と積極的にペアワークをする、先生と授業の後にお話ししてみる。

・（国際関係など専門科目を学ぶコースでは）パンフレットには「英語のサポートがある」と書いてあるけどほぼないに等しいので、スピーキング、リスニングが苦手だととても苦労する。クラスのディスカッションはレベルが高いので、全然ついていけないと、刺激を受けることはできるけど学習効果はあまりないかも。

・英語を話すのが苦手な私でもディスカッションなどに参加できてとてもいい経験になったので、チャレンジが大事です！

2. 宿泊施設について

・お鍋やシャンプーなどが揃っているので生活用品は特に買い足す必要はありませんでした。

・毛布が一枚しかなく夏でも結構寒かったので、ブランケットまたは厚手の寝間着を持ってくるとよいかと思います。

・水回りの環境はいいとは言い難いです。

・特に９月に入ったあたりからは、ロンドンは朝晩がかなり冷え込みます。布団が驚くほど薄いので、ブランケットが重宝します。

・週末に清掃が入るのですが、トイレットペーパーやタオルを入れ忘れられることが多いので、躊躇せずにインフォメーションに相談しに行くことをお勧めします。

・夜は結構寒いので、荷物に余裕があればかけ布団みたいなのがあるとよい、おひるごはんはスーパーで買ったものでサンドイッチを作るなどして節約を。ポットや食器など汚いものも多いです。

・少しでも日本食を持っていくとよい。

・洗濯は３、４人でシェア

・個人の部屋はかなり暗い
・寮の設備はフラットによってかなり差がある（エレベーターを使えない棟があったり、キッチンに調理器具が揃ってなかったり）
・水に流せるティッシュやハンガーを日本から持参することをお勧めします。

３．現地での生活について

・治安も日本に比べて悪い感じがあまりせず、昼間は安全です。ただ、どこの国でも同じように夜は不審者もいました。そのため、あまり夜遅くには出かけないほうがいいと思います。
・ロンドンは物価が高く毎回外食というのは厳しかったので、寮のキッチンを借りて自炊することをお勧めします。
・ボックスティッシュ、ミニ調味料、食器（100 均のもの）、風邪薬、胃薬などがあると安心です。体調を崩しやすい人は特に、普段使い慣れている薬を忘れずに。身の回りのもので普段は意識しないけどないとかなり困る、といったものを把握して持っていくように心がけましょう。
・物価が高く、また野菜などはパックの内容量が多いので、自炊の際食材揃えるのにそこそこ苦労します。同じフラットの人と共有しあうなど、食事のバランスを崩さないような工夫をすることをお勧めします。
・観光地などでは気軽に声をかけてきた人とは写真を撮ったりしないように、危険です。
・夏でも寒いので羽織りものは必ず必要
・学生割引がけっこうあるので学生証は持ち歩く
・お店は早く閉まります
・寮の近所にいくつかスーパーがあるけど、テスコは日曜日に行くとしまっていることがあるので注意
・地下鉄を利用するときは、オイスターカードがあると便利
・３週間でも日本の食べ物が恋しくなったので、日本から春雨スープや味噌汁を持っていくとほっとします。

４．その他

・イギリスは親切な人が多かったです。
・目標をもって留学に行くと、留学の意義を意識して楽しめると思います。せっかく時間とお金をかけて得られている機会なので使い倒していきましょう。

McGill University（カナダ）

１．授業について

・このMcGill大学のプログラムは日本人学生がカナダの文化を学び、そこで実際に生活することで、英語にImmersion(浸る)するということが目的のものでした。クラスは事前に行われたライティングとアンケート、そして英語検定などのスコアによってレベル別に割り振られました。午前中の授業では、このプログラムの為に作られたカナダの文化を題材としたテキストが共通で使われましたが、クラスごとに実践的なコミュニケーションを学んだり、ディスカッションをしたり様々でした。午後は課外授業のような形でノートルダム大聖堂や現代美術館などモントリオールの各所に行きました。全体的に、このプログラムはカナダの文化に触れる・学ぶことに重点が置かれていると思いました。なので、初めて海外に行く人や英語にあまり自信のない人にとっても、参加しやすいプログラムだと思いました。また、モントリオールの街はフランス語で溢れていたので、フランス語と英語どちらも学びたい人にとても良い所だと思いました。

・事前のテストで細かくクラス分けされます。日本人学生のみです。9時半～12時までネイティブの先生による英語の授業。少人数制で、グループワークも多く、あっという間です！

・午後は、モントリオール観光です。日本人学生６人にネイティブの学生１人がついてくれます。英語を話す絶好の機会です！本当に仲良くなります！

２．宿泊施設について

・大学寮に宿泊していました。平日はほとんど食堂で3食出たので、食事に困ることはありませんでした。大学寮では、他の地域からの留学生やマギル大学の学生と英語で話したり、夜は人狼やトランプゲームをしたり英語でコミュニケーションを取る機会が多くありました。部屋は個室で、各階にシャワールームがありました。部屋にはエアコンが無かったので、温度調節は窓の開け閉めでしていましたが、モントリオールは夏にも関わらず寒い日があったので、体温調節が出来るように秋用の上着もあったらいいと思いました。また、寮はモントリオールのショッピング街と街を一望できる山の近くに立地しているので、とても快適でした。

・日本人学生10人に対して、１人のネイティブ学生がついてくれます。朝ごはんや晩御飯を共にします。食事中は、もちろん英語で会話し、本当に家族のような仲になります。

・大学の寮で、一人部屋が与えられます。ストレスなく過ごせます。

・部屋にエアコンがなく、夜が暑かったりしました。

・シャワーとトイレが共同
・シャワー後などのためにビーチサンダルは必須です。
・朝、昼、晩と寮の食堂で食べます。ホテルのようで、普通に美味しいです。バイキング形式なので、セーブできます。

３．現地での生活について

・モントリオールはパリに次ぐ第２のフランス語圏で、街にはフランス語の標識が溢れ、街の人々もほとんどがフランス語でしたが、英語で話してほしい意思を示すと英語で話してくれてモントリオールの人々はすごいなと思いました。また、モントリオールではブランチ（朝ご飯とお昼ご飯を一緒にした食事）が一般的で、休日の 11 時台はどこのお店もブランチを食べるお客さんでいっぱいでした。また、モントリオールは午後６時頃には多くお店が閉まっていたので（飲食店は除く）、日本とは全然違うなと思いました。
・８月のモントリオールは、とても快適に過ごせます。昼間はＴシャツで十分です！朝と夜が少し肌寒いかなという感じです。
・夜８時ごろまで明るいです。治安もよいので、学生だけでショッピングに行く子もいました。
・物価は、日本と同じくらいでしょうか。
・私は、便秘になりとても大変でした。下痢止めの薬は持って行っていましたが、便秘薬は持っていなかったので、カナダで買いました。私の友達でも、便秘気味の子が多かったので、気を付けたほうが良いかもしれません。

４．その他、伝えたいこと

・初めての海外を経験し、何よりも大切だと思ったのは荷物の量への配慮とお金でした。日本での生活、特に東京での生活に慣れていると全然感じ無かったのですが、海外は、重い荷物を持った人には、東京のように公共交通機関や道路は利用しづらいことが少なくないと思いました。なので、ひとりでも持ち運びが楽に出来るような最小限の荷物を持っていくと良いと思いました。お金に関しては、カナダはクレジットカード社会で自販機でもどこでもクレジットで支払い機能が付いていたのですが、カナダでは日本のようにサインのシステムはありませんでした。なので、事前に暗証番号を確認してから行くことをお勧めします。また、カードだけに頼ると取られてしまった時に大変なので、日本である程度現金をカナダドルに両替して持っていくと良いと思いました。また、プログラム最後の日にフェアウェルパーティーがあるので、何か一着フォーマルな服（ド

レスなど）を持っていくと良いと思います。（私は知らなかったので現地で購入しました。笑）そして、日本のお土産を何か準備しているとホームステイ先の人や現地での友達にプレゼントできるので良いと思いました。

・このプログラムの参加者は、上智大学や津田塾大学などの日本人学生が多く参加しています。ただ、お茶大からの参加者は少なく（私たちの時は２人！）、日本人で固まることは少なかったです。マギル大学のネイティブの学生たちが、本当に面倒みよくかまってくれます。皆さんも、どうぞ素敵な出会いを楽しんでください！何か質問があれば、李さんを通して何でも尋ねてください。

University of Strasbourg（フランス）

１。授業について

・各国からフランス語学習者を集め、初回の試験の成績でクラスを決める。学習歴の長い人が多かった。授業はほぼフランス語で行われる。週末には試験があって、成績が修了書に載る。

・午後は自由参加で、OC のようなアクティビティ中心の授業がある。

・平日午前、午後に 4 時間フランス語の授業をする。

・週に 2 回自由参加の授業、その他アクティビティもある。

・アクティビティは希望制で、参加費は初日の申し込み時に現金で払う。

・フランス語で授業を受けるので、初心者にとっては少し大変。

・文法の勉強もするが、ペアワークやプレゼンなど実際に人前でフランス語を話す機会が多い。

・仏和辞書は必須。

・生徒にフランス人はおらず、日本人が多い。

・文法など細かいことは気にせず、積極的に発言し授業を楽しむことが大切。

・意欲さえあれば、自分の目指すレベルまで勉強できる環境が整っている。

・アクティビティに積極的に参加し、他の参加者とフランス語で話すことも楽しみのひとつ。

２．寮について

・Amitel というユース向け？の宿舎。学校に近い。レセプションが空いている時間が限られているので注意。キッチンの使える時間もその時間に対応する。近くの別館のキッチ

ンは常時使用可能？洗濯機、乾燥機の利用は 3 ユーロ。アイロンはフリー。冷蔵庫は部屋に添え付けでない場合もあるが借りられる。ネットはすごく遅いけど使える。
・近所に simply というスーパーがある。日曜は空いていないがわりと何でも売っていて便利。買い物袋を持っているといい。
・学校から徒歩 15 分～20 分ほどのところの寮。
・足拭きマット、物干しロープ、スリッパがあるとよい。
・共同キッチンがある。
・宿泊費はクレジットで支払い可。
・金庫がないので、貴重品管理には気を配る。
・別の留学生や社会人の方々も沢山いらっしゃるので、コミュニケーションをとるとよい。

３．現地での生活について

・日曜日にはスーパーなどほとんどの店が閉まっている。
・平日はスーパーが 20 時、その他のお店は 18 時頃に閉まることが多い。
・夏はサマータイムで 21 時頃まで明るい。
・近所の大型スーパーには食料から日用品まで、生活に必要なものは揃っている。
・暑い日寒い日と気温の変動が大きいので、服装は考えて持って行く。
・スリには注意。
・比較的治安が良く、目立つ格好（浴衣など）で出歩いても危険な目には合わない。
・アジア人は珍しいようなので、英語で話しかけるより挨拶だけでもフランス語でする方が、円満な関係を築きやすいと思われる。
・ストラスブールの治安はヨーロッパの一都市としては非常に良い方。夜も賑やかなので一人歩きも安心。ただ人混みではスリなどへの警戒は必須。テロ警戒のため兵士によるパトロールも常時行われている。日本とは違うのだということを忘れてはならない。
・言葉がわからなくても丁寧に伝えようとすれば真摯に応えてくれる人が多い。観光地として栄えているので愛想・サービスも良い。

４．その他

・パーティーに参加する場合があるので、普段着の他きちんとした服もあるとよい。
・大学の先生でも英語が話せない人が多い。
・現金は多めに持って行くとよい。
・移動する場所への地図は印刷しておくと便利。

・移動等が大変になるので、荷物は多くなりすぎないほうがよい。
・ストラスブールは、ドイツとフランスの文化が混在した街なので、他の都市と比べながら地方都市の雰囲気を満喫してほしい。
・自分がなぜここへ来たのかをよく考え、貪欲に学んでほしい。

Ewha Womans University 梨花女子大学校（韓国）

１．授業について

・授業は各々の語学レベルに従ってクラス分けされるのでそこまで難しくはない。
・宿題が出る日もあるが 1 日 15 分くらいで終わるもの。
・全体的に特に心配すべきことはない。
・いろんな国の人と一緒に勉強するので、外国の人と仲良くなれる。
・会話をして学ぶ授業なので身に付きやすい。忘れにくい。
・先生がとても親切な方たちばかりで、授業外でも質問できる。相談などもできる。

２．宿泊施設について

・新しい寄宿舎と古い寄宿舎があるが、どちらも綺麗。料理はできない。
・二人部屋の場合ルームメイトの母国語が選べるが、
・外国人と住んでいた人はたった二週間でも文化の違いに戸惑って殆ど不満を言っていたので、日本語を選択したほうが良いかも。
・トイレとバスルームがくっついていて、湯船がない。
・トイレットペーパーは置いていないので買って使う。
・ドライヤーは借りられるが、毎回返さなければならないので、持っていくべき。
・無線 Wi-fi は各部屋になくラウンジとコンピュータールームにしかない。有線はある。
・何かとティッシュは役に立つのでボックスのを持っていくとよい。
・素足で部屋を歩くのが嫌な人はスリッパも持っていくとよい。
・部屋とラウンジを行き来することが多いので、楽なサンダルなどあるとよい。

３．現地での生活について

・授業、FT のあと夕方から友達とご飯を食べに行って夜に帰ってくるという生活をしていた。
・門限はないし土日は授業がないので割と自由時間は多い。

・電車賃が安い。

・英語はあまり通じない。

・生野菜は意識して取らないと食べない。

・車には気を付けたほうがいい。

・韓国料理は辛いので、体に合わない人もいる。

４．その他、伝えたいこと

・二週間は短いので計画性をもって行動すると良い。

・梨花女子大学校のメインの建物は本当にかっこいい。

・大学近くの店（服屋や靴屋）は値切りできる。

・コスメショップで何かを買うとサンプルをたくさんもらえる。

編集後記　Editor’s Note

私が留学していた時のことである。大学寮に住んでいたが、入寮して間もないころの一小事件。ゴミ捨て場でゴミを分別していたが、なかなかその分別の仕方が難しかった。初めての国、一応ゴミ分別の説明は聞いたものの、それだけではなかなかわからないものである。ゴミ分別の基準が今まで自分がやってきたのとまったく違ったので「このゴミはどっちになるの」と頭を何回も悩ませながらゴミ分けをしていた。しかし、がんばって分けていた努力も虚しく、掃除の方を怒らせてしまう結果となった。結局私の分別が間違っていたのである。その寮は留学生だけの寮だったので、掃除の方は、住居者たちの繰り返される間違ったゴミ分別に、堪忍袋の緒でも切れたのかもしれない。そのとき言われたのが「このゴミ分別のやり方って常識じゃない。なんでわからないの。」だった。おそらくその方は、ほかの国でもゴミの分別の仕方は自分の国と同じだと思っていたのだろうか。そこでふと「常識とはどういうものか」というのを考えさせられた。私にとってその分別方法は常識ではなく「新知識」だったが、ある人にとっては「常識」である。ということは、私が今まで常識だと思ってきたことも、ほかの人、ほかの国にとっては常識ではなく、新発見、新知識にすぎないかもしれないというのを実感したのである。そこから私は、その考え方が留学生活において、成功のキーの一つになると思い、客観的な立場と考え方をもって物事に接するように努めた。

実際、留学をしてみると、世の中は「新知識」であふれていることがわかる。そして自分の中の「常識」は意外と相対的なところが多いということも気づかされる。そうなると、物事に対する考え方や視野が徐々にフレキシブルになっていく。柔軟な生き方が、いろいろな可能性、いろいろなヴィジョンにつながると私は信じている。この能力こそ今の若者たちに必要なのではないだろうか。その出発点として、この短期留学はいい機会になる。2～6 週間という短い間に世界の広さを少しでも体験し、実感することは非常にいい刺激になる。それを皮切りに、もっと世界を見てみたいという好奇心が沸いてくる、外国語学習へのモチベーションが上がる、自国のことを客観的に見直せる、よりグローバルな将来の計画を立てられるなど、人生において貴重な成長になると私は強く思っている。

これからもみんなが、お茶の水女子大学の学生として高い志とチャレンジする精神をもって留学に挑んでほしい。

李京和（い・きょんふぁ）

Kyunghwa Lee

2015年度夏季　海外短期研修報告書

発行日　　2016年1月

発　行　　お茶の水女子大学　グローバル教育センター
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
Tel. 03-5978-5913

研修担当
グローバル教育センター　アソシエイトフェロー　李京和（い・きょんふぁ）

編　集　　グローバル教育センター　アソシエイトフェロー　李京和

印刷・製本　よしみ工産株式会社